デッド　オア　アライヴ

水城空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デッド　オア　アライヴ

【Ｎコード】
Ｎ０９８０Ｍ

【作者名】
水城空

【あらすじ】
Ｔ－Ｍ．Ｓ＜トランス・ミッション・スクール＞それは世界各地から集められた秀才、実力者を更に教育し国の平和を保つために作られた学校。　そこに通う亜莉朱と城下に、与えられた仕事とは――。　『これは、復讐だ』　爆発テロ。教師達の失踪。友人の裏切り。　そして明かされる真実。　迫りくる危険の中で、二人は生き残ることができるのか？　学園ミステリー、開幕。

【第一章　愛、故に死】　ｅｐｉｓｏｄｅ．１　愛、故に死

「そろそろだね…」

とある町外れの豪邸。
その中の一室で、キングサイズのベッドに腰かけ、時計を見て嬉しそうに笑う少年がいる。
短く切りそろえられた白い髪に、一房黒い髪が混じり、小柄で手足がしなやかに細い少年だ。

そんな彼がいる部屋へ、段々と近づいてくる足音が。

その音を聞くと少年はベッドの下へと手を入れ、何かを取り出すと部屋のドアに向け、構えた。

「ジョーカーくん！」

ドアが開き、一人の少女が顔を出した。

その瞬間、　　発砲。

「きゃああっ！？」

ナイスタイミングでそれをかわす少女。

弾丸は少女のすぐ横をかすめ、開け放したままのドアから廊下の壁へと当たり、床へ落ちた。

「ちぇ…っ」

先程ジョーカーと呼ばれた少年は、つまらなそうに唇を尖らせる。

「もうっ！ジョーカーくんっ、何で毎回毎回こんな事するのっ」

赤い縁の眼鏡に黒髪のおさげ、白のラインが入った黒のセーラーカラーとスカートに薄い灰色のサマーセーターにといった格好をしている少女。

そんな彼女は涙目でジョーカー、本名城下乃愛（しろしたのあ）に訴えた。

城下はそれを聞くと、不適に微笑して答える。

「殺したいほど愛してるから（笑）」

「笑いはいらないでしょーっ」

そう言って少女は長々と抗議を述べるが、

「ねぇ、アリス？」

ふとその言葉を遮り、城下が少女亜莉朱（ありす）の名を呼ぶ。

「せっかく来たんだから、近くにいてよ？ね、」

甘えるような声を出し、両手を差し出す城下。

「……、うん」
亜莉朱はドアから離れ、城下へと近づいた。
城下は座ったまま、自分より少し背の高い彼女へと腕を回し抱きしめる。

「…ねぇ、ジョーカーくん」
城下に身を預け、心なしか顔の赤い亜莉朱は誤魔化すように彼を呼ぶ。

「何？アリス」

「“学校”…そろそろ行かないと。ジョーカーくん卒業できなくなっちゃうよ？」

「この間の定期テストは行ったよ。結果は一位」

そう言って心配する亜莉朱に城下はけろりと答える。

「もう…、そうじゃなくて…っ？」

すると城下は亜莉朱から手を離し、立ちあがった。

「ジョーカーくん？」

「僕、明日は学校に行くよ」

「え、本当！？」

亜莉朱が嬉しそうに笑う。だが、

「でも…どうして急に？何かあったの？」
すると城下はベッドの向かいの位置にあるコンピューターデスクへと向かった。
それを少し操作し、彼はある画面を表示する。
「これだよ」
城下が振り返り、亜莉朱を呼ぶ。
「これは…“学校”からのメール？」
亜莉朱は城下の横から画面を覗き込み、送信先を見る。
「うん、Ｔ-Ｍ．Ｓ（ｔｒａｎｃｅ・ｍｉｓｓｉｏｎ・ｓｃｈｏｏｌ）からのお呼び出しだよ。本当は無視したいところだけどね」
そう言って軽く肩をすくめる城下。
「夕方来た、Ｔ-Ｍ．Ｓからの緊急指令。『本日の０：００にてＴ-Ｍ．Ｓ本部を狙ったテロ予告。
これにより以下のＭＳメンバーは明朝、必ず登校のこと。
＞策略者＜ｊｏｋｅｒ　城下　　＞技術者＜ｄｉａｍｏｎｄ　代安
＞能力者＜Ａｌｉｃｅ　亜莉朱　　＞技術者＜ｈｅａｒｔ　八藤
以上４名』」

そして淡々とメールを読み上げる。

「えぇっ！？また私メンバーに入ってるの？」

「そうだね。アリスはＭ・Ｓ無二の超能力者だから、仕方ないよ。それに毎回って言ったら僕も同じだよ？本部では唯一の策略者だしね」

そういうと城下は亜莉朱へ顔を向けた。

「…ねぇ、アリス」

「うん？」

首をかしげる亜莉朱。

「眼鏡、外して？」

城下はにこっと笑う。

「…ん、」

城下に言われた通り、亜莉朱は小さく頷くと眼鏡を外した。
眼鏡を外すと亜莉朱の目は黒から深い青へと色を変える。
これが亜莉朱の能力、“真実の瞳”。
嘘をついた人間にだけ黒い靄がかかったように見えるのだ。
つまり視線を向けた相手の言葉が真実かどうかを見極めることができる。

常に眼鏡をかけることで人の嘘を見極めないようにしている亜莉朱

は、必要以外眼鏡を外すことをためらう。
裏切られるのを知ってしまうのは怖いから。

「そう、いい子…」

城下が微笑み、亜莉朱を抱きしめる。

でも、そんな亜莉朱も城下の前ではあっさりと眼鏡を外す。
城下本人曰く“邪魔だから”と、亜莉朱曰く“城下は自分を裏切らない”から。

「ジョーカーくん…」
亜莉朱も抱きしめ返す。

「乃愛って呼んでよ、アリス」

城下が亜莉朱の耳元で囁く。

「ノアくん…？」

「違うよ、“ノア”。くんはいらない」

「…ノア」

亜莉朱が恥ずかしそうに言った。

「ん、上出来」

城下はそんな彼女の頭を優しくなでる。

「…アリス、僕のこと好き？」

「うん、好き。大好き」

城下の胸に顔を埋め、幸せそうに笑う亜莉朱。

「僕もアリスが大好きだよ。愛してる、殺したいくらいに…」

城下乃愛、別名　策略者＞ｊｏｋｅｒ＜。

彼の物語は今、始まったばかり――――…。

［第一章　愛、故に死］　ｅｐｉｓｏｄｅ．１　愛、故に死　（後書き）

２年前から、ずっと書きためていた小説です。
どうぞ最後までお付き合いください。

episode. 2　過去と仲間

「や、アリスちゃん。お帰り」

早朝のT―M・S、女子寮の一室にて。

ドアを開け、入ってきた亜莉朱に同室の少女が声をかけた。

ベッドに寝転がり、本を読んでいる。

「あれ、しぐれさん。まだ起きてたんですか？」

驚いたように亜莉朱は言う。

「うん、なかなか眠れなくてね。でも珍しいね、アリスちゃんが朝帰りなんてさ。まぁ、若者の付き合いに口を出すつもりはないけど…朝帰りは感心しないな。例の彼氏とラブラブなのは結構なことだけどね」

読んでいた本を閉じ、そう言いながら少女――八藤しぐれは微笑する。

ブラウン色の長髪を高い位置でポニーテールにしている。

前髪は上へあげてヘアピンで止めているので、全体的にすっきりとした髪型だ。

「え…っ、しぐれさん。別にそんな誤解を受けるようなことはありませんよ！それにしぐれさん、私より二歳年上なだけですし…っ」

「ふーん、そうかい？じゃあ彼氏くんの家でナニやってたのかな？」
ニヤニヤと笑いながら、八藤は亜莉朱を見る。

「ナニ…って、だからなにもないですって！」

「元気だねぇ、アリスちゃん。　何か嬉しいことでもあったのかい？」

「もうっ！しぐれさんなんか知らないっ」

八藤の集中攻撃に耐えられなくなった亜莉朱は、背を向けて自分のベッドの方へと向かった。
そして手早くパジャマに着替えると布団に潜り込む。

「ねー、アリスちゃーん」

亜莉朱がいる反対側のベッドから気楽に声を掛けてくる八藤。

「…何ですかっ」

「こっちの生活にはもうなれたかい？　3年目になるけれど」

背を向けているので表情はわからない、口調も変わらなかった。

「…だいぶ、馴れましたよ。おかげさまで。みなさん、親切にしてくれますし」

――3年前、当時の社会には、能力者など稀で、

あることを条件に、亜莉朱は貴重なサンプルとして研究所に送り込まれたのだった。

そして毎日様々な不正実験をされ、精神的にも最悪の状態に陥りそうになったとき――…

「しかし、君とジョーカーが幼なじみだったとはね。しかも今は恋人だろう？
まったく、驚かされてばかりだよ」

「…確かに、ジョーカーくんと私は幼なじみでしたけど…。
中学からジョーカーくんはＴ－Ｍ．Ｓに入学してしまったのでそれ以来会ってませんでしたよ」

――そんな時、彼は現れた。

もう二度と、会えないかもという別れさえ告げずに消えた、幼なじみが。

『――久しぶりだね、アリス』

数年ぶりに会った幼なじみは、なにも変わっていなかった。

昨日も会ったみたいな口振りで、今日もまた当たり前に会ったように。

そしてＴ－ＭＳに能力者として研究所から拉致に近い“保護”をされた。

「お父さんとお母さんは？あの場所にとどまったのかい？」

「…多分、もう生きてないと思いますよ。私があの場所にいることが、父と母が生きていられる条件だったんですし」

貴重なサンプルとして研究所に送られた条件、それは借金を抱えた両親の肩代わりだった。

元々、亜莉朱の両親は自分たちの娘をいざと言うときの道具としか思っていなく、亜莉朱が不正な実験をされていもお構いなしだったのだ。

そこへ、Ｔ－Ｍ．Ｓのメンバーが乗り込んできたというわけだ。

亜莉朱を助け出し、能力者としてＴ－ＭＳに招くために。

「みんながあの場所から私を連れ出してくれたから、私は今ここにいられます。…本当に、感謝してます」

これは本音だ。

身内に裏切られ、精神が壊れる寸前だった亜莉朱。

新しい環境や仲間、そして夢にも見なかった幼なじみとの再会に感激を覚える。

「はは、どうしたんだいアリスちゃん。そんな改まって」

照れ隠しなのかわからないが、そう言って流そうとする八藤。

「…なんとなく、です」

「今更言うことでもないだろう？それに礼なら前に君から充分聞いたんだからさ。こんな話を持ち出したからかな。ごめんよ、気を使わせる話をしてしまって」

いえ、そんなことは。と亜莉朱は答え、続いて部屋の灯り消していいですか？と聞く。

「そうだね、もう寝ようか。明日は“学校”から集合かかってるんだし、遅刻するわけにはいかないね」

亜莉朱はそれを聞くと起き上がり、リモコンを手に取る。

そして眼鏡を外して横へ置くと、灯りをリモコンで消した。

「お休みなさい、しぐれさん」

「うん、おやすみ」

ｅｐｉｓｏｄｅ．３　集合プログラム

Ｔ－ＭＳ＜トランス・ミッション・スクール＞、それは世界各地から集められた秀才、実力者を更に教育し国の平和を保つために作られた学校。

中高一貫教育により、様々な資格や権利を得て実力次第では高額の報酬が手に入る。

そのため入学希望者が後を絶たないが、入学できるのはほんの一握りの人数で千人いれば百人入れるという計算だ。

なかでも１つ例外なのは＞能力者＜で、超能力を持つ者は本人の同意さえあれば入学できる。

しかし今現在、Ｔ－ＭＳにいる能力者は約一名――……。

「…アリス？僕の話聞いてた？」

城下の言葉にはっと我に返る亜莉朱。

「あっ、ごめんジョーカーくん。ぼーっとしてたっ、何？」

翌日、寮の外で合流した亜莉朱と城下は、一緒にＴ－Ｍ．Ｓの校舎へと向かっていた。

校舎と言っても、ビルのような造りの建物で壮大な面積を誇ってい

る。

グラウンドはなく、ただ広いコンクリートでつくられた敷地を通り過ぎると、建物の玄関へたどり着いた。
声帯とＩＤチェックを受けて中へと入る。

「だからさ、あの代安（たいあん）って奴。　知ってる？」

「代安って…＞実力者＜の代安ルキトくんのこと？」

玄関の受付を抜け中央にある螺旋階段を登りつつ、亜莉朱は前にいる城下に返答をする。

「そう、聞いたことない名前だったから。一応調べては見たんだけど、この“学校”の名簿には載ってなかったんだ。でも今回のメンバーに入ってるし」

「うーん、私もそんなによく知らないけど、ちょっと聞いたことあるんだ。
なんか、海外でＴ－Ｍ．Ｓのメンバー研修してた人なんだって。今日、帰ってくるって話だよ」

「ふーん」
　城下は大して興味なさげに返事をするとその話を断ち切り、長く続く廊下の途中でふと足を止めた。

「ジョーカーくん？」

そんな彼に亜莉朱が問う。

「ロッカーから荷物とってくるよ。　アリスは先に教室に行ってて」
そういうと城下は教室へ続く道からそれ、曲がり角へ向う。
「う、うん。そうだねっジョーカーくん学校あんまり来てないから荷物全部ロッカーの中だもんね」
わかった、と亜莉朱は返事をして教室へ向かった。

＊　＊　＊　＊　＊

「おっはよー！アリスちゃんっ」
亜莉朱が教室に入ると、真っ先に声をかけてくる少女の姿が。
「あ、おはようった李（リィ）ちゃん。今日は早いね」
亜莉朱がそう返事すると李と呼ばれた少女はにっこりと笑う。
「えへへー今日は早く登校なのです～。ある情報を聞きつけましたから～」
オレンジ色のベリーショートの髪に、パールの付いたヘアピンを二本。
派手なヘアースタイルに合わせているのか、制服であるセーラー服

の赤いリボンは黄色のスカーフに替え、下はスカートの代わりに迷彩柄のズボンをはいていた。

「情報？」

亜莉朱がそう首を傾げると、

「そうだよっ！あの＞策略者＜が今日学校に登校するっていう！！」

目をキラキラ輝かせ、そう語る李。

「えーっと、ジョーカーくんのこと？」

李の目が更にキラーンと光る。

「そういえば～ジョーカーこと城下乃愛くんとアリスちゃんて、付き合ってるんでしたっけぇ～？」

「え、あ、うん。それがどうかしたの？」

いきなり振られた話題に亜莉朱は戸惑いつつ、答えた。

「私さー、城下くんに憧れてＴ－ＭＳに入ったんですよ」

「うん、知ってるよ。＞策略者＜志望だったんだよね？」

「そう。で、結局無理だったの…私に＞策略者＜は向いてなかった。与えられた情報を処理して、記憶することはできた。…でも、そこから策略に繋げる事が出来なかった」

だんだんとその声は小さくなっていく。

「……李ちゃん…」

「…そして、私は情報屋（clover）になった。あらゆる情報を自らの力で得、記憶する。
それを必要な限り、伝える」

「うん…」

「だから、今の私は人々の情報。世界のあらゆる情報を知っている。
今では知らないことの方が少ないくらい。……だけど」

「だけど？」

「生徒会（ロイヤルメンバー）、特に城下くんの情報はほとんど知らないのよっ」

ばちーんっ、と手前の机を叩く李。

「へっ？」

意外な展開に、亜莉朱は拍子抜けな声を出した。

「生徒会、つまりＴ－ＭＳで最も実力及び才がある人たちの中で城下くんの情報が全然得られないのっ」

「う、うん？」

「唯一知っていることと言えば、いつからこの“学校”にいるとか…成績とかですし。
学歴も不明っ、家族構成だってお姉さんが1人いるってだけで両親

のこととかも不明っ」

「なら、ジョーカーくんに直接聞いてみれば…」

「城下くん学校来ないじゃんっ」

「でも、今日来てるから…ね？」

そういって亜莉朱は曖昧に笑ってみせる。

「…無理よ」

李がポツリと呟く。

「え、何で？」

「城下くん可愛い過ぎるからっ！！」

「えっ？」

「だってだって！学校の制服完全無視のゴシックファッションっ！白い肌に細くて綺麗な足っ！ボーダーソックスにちょっと長めのサラサラの髪っ小柄で可愛いあの容姿っ！もうヤバ」

「……、」

「もう近づいたら死んじゃ――…」

「――何してるの？アリス」

ふと、後ろから声がかかる。

聞き覚えのある、少年にしては高いトーンの声。

「ジョーカーくんっ、」

亜莉朱が慌てて振り返る。

「行こっか？アリス」

「あっ、うん。私達呼び出しかかってたんだよね！急がなきゃ」

亜莉朱は窓際の席から立ち上がり、キチンと並べられた机の間をぬって城下のもとへ向かった。

「じゃあ行こう」

城下がそう言い、二人は廊下へ出る。

廊下には移動する生徒が多くいたが、二人の目的地が近づくにつれ人気もなくなってきた。

「あー…、僕。あの人嫌いなんだよねー…」

目的地につき、ドアを開ける前に城下が亜莉朱の横でそうぼやいた。

「そうなの？私は割と好きだなぁ～…、それに私の恩人の１人だしね」

「まぁ、確かにあの人じゃなかったらアリス助けに行けなかったからね。そこらへんはまた別なんだけど…でも…」

城下はそう言いながらドアをノックする。

そしてゆっくりとドアを開けた。

「――久しぶりです、学校長」

episode. 4　女王伝説

「うん、マジでひっさしぶりーっ☆　元気してたかぁーいっ？城下っ！！」

室内に入るなり高いテンションで二人を招き入れたのは、このＴ－ＭＳの学校長こと支配者（ruler）。

高級そうな椅子に腰掛け、機嫌よく笑う。

――西本白葉（にしもとびゃくは）。

その名は今目の前にいる人物の名であり、前学校長を暗殺し、この学校をのっとったと悪名高き人物の名なのだが――……。

「いやー、正直来てくれるとは思わなかったよ～。学校に城下全然来ないしぃ～」

そういって語り始める＞支配者＜は…

金色の髪をツインテールにしていて、黒のセーラーと言う先代の制服を着ていた。

外見年齢は十代後半の容姿をしている。

足をぶらぶらと揺らしている仕草は年下にも見えよう。

「てわけでーっ！八藤もまだ来ないけどーっ早速本題に入るよーっ

☆」

「普通は入らないよね、アリス」

「う、うん」

「ちなみに代安くんもまだ来てないーっ☆」

「てゆーか代安ってよく知らない人なんだけど…」

「うん、私も」

「スケさんとカクさんもいないーっ☆」

「もう帰って良い？」

「多分駄目だと思う…」

「すみません学校長、遅くなりました」

そういって室内へ入ってきたのは八藤。

「ううん、大丈夫〜」

そういってひらひらと手を振る白葉。

「まだ代安も来てないんだよぅ！八藤なんか聞いてない？？」

「いや、私は特になにも…。それに代安とは今回が初対面です」
当たり前だ。今まで代安という人物は海外にいたのだから。
「マジで代安来ないし…あとで資料制作して渡しとくか～。めんどーっ！」
「あのー、白葉さん」
城下の隣でずっと黙っていた亜莉朱が遠慮がちに手を挙げた。
「はぁーいっ！？何かなアリスちゃーんっ、うふっ」
テンションの高い、白葉はイスごと振り返った。
「え…っと、その代安ルキトくんってどういう人なんですか？全然知らない人と、いきなりチーム組んで活動とかちょっと不安っていうか…」
「うーん？実は代安は私もよく知らないんだ。でも私の旧知の人が推薦…っていうか、海外研修のメンバーにいれたからまぁ心配ないかなって」
「旧知の人？この“学校”の卒業生ですか？」
「うん、いいとこついてるね八藤。その通り～私の同級生だよ」
何が楽しいのか白葉はうふふ、と意味深げに笑った。

「みんなにもいつか紹介するよ。まぁ、その話は置いといて…代安はメールで伝えたと思うけど実力者（diamond）なんだよね。しかも海外で研修してたからいざって時の経験も多く積んでいると思う」

だからまぁ、と白葉は続ける。

「もしヤバそうな人だったらアリスちゃんが確かめればいいっしょ？　ね、アリスちゃん」

「へ？　あ、はい。そうですね」

いきなり話を振られたが亜莉朱はなんとか答えた。

「じゃあ、本題に入ろっか。メールで知ってるだろうけど再確認」

白葉は深く椅子に座り直すと、肘おきに寄りかかり頬杖をついた。そしてパソコンのデータを見ながら長々と語り出す。

「えー、おととい零時にＴ－ＭＳ本部を狙ったテロ予告。犯人は不明、予告方法はＴ－ＭＳの事務室にあるコンピューターへ、だね。基本的に“学校”のコンピューターの内容やアドレスは外に漏れることはないと思うんだ。よっぽどの技術がないとロックの解除は不可能。

だから――――…

部外者の可能性は、薄い」

ごくり、と誰もが息を呑んだ。
時が止まったような気さえした。

「でもその推理を成り立たせて…つまりフェイクをして部外者だったっていう可能性もあるはあるんだけどね。とりあえず、部外者の可能性は薄い」

「…学校長、ひとつ聞いてもよろしいですか？」

「ん、八藤。なにかな？」

「その予告には、何が書かれていたのですか？」

「あぁ、予告文章に不自然は無かったかってこと？いたって普通の文章だったよ。暗号とかは考えにくい」

怪盗の予告状じゃないんだからね、と白葉は肩をすくめて

「予告にはこう書いてあったよ。

『本日零時、Ｔ－ＭＳ本部に爆発物を設置。

脅えるがいい、おまえ達の命は今我の手の中にある。

これは――――　復讐だ』」

ｅｐｉｓｏｄｅ．５　計算と集散

「復讐かぁ…、なにか恨みでもあるんですかね？」

「ん、復讐ってことはＴ－ＭＳの関係者…もしくは卒業生にも絞られるだろう。本当の所はよくわからないが」

学校長との話を終えた今、亜莉朱と八藤は“学校”内の見回りをしている。

城下は白葉にこれからの策を伝えるらしく、学校長室に残った。

『もし、僕のいないところでアリスに何かあっても八藤がいれば大丈夫だろうしね』

ということらしい。

「犯人がわからない今、とにかく爆発物を見つけださないといけないね。いつ爆発かすらもわからないし」

「そうですね……」

城下をふと思い出していたので心ここにあらず、という感じで亜莉朱は返事をした。

「…アリスちゃん？どうかしたのかな？」

「え…っ、いえ何も」

「ん？城下が恋しいのかい？？」

にやり、と八藤は笑った。

「ちょ…っ、しぐれさん！今はそれどころじゃないでしょうっ！からかわないでくださいっ！」

「冗談だよ…、まぁ城下とはすぐ合流出来るから。それに、何かあっても私がいるからアリスちゃんに怪我させたり…ってことについては心配ない。絶対、守るよ」

そう言ってさっきの笑みとはまた違う、綺麗な笑顔を浮かべた。信頼できる、とても自信に満ち溢れた笑みだった。

「あ、ありがとうございます。　…私ジョーカーくんみたいに頭もよくないし、しぐれさんみたいな戦闘能力も皆無ですから…全然、みんなの役にたてなくて…。…頼ってばかりで……」

ぽつりと呟き、俯く亜莉朱。

城下のことを考えて、久しぶりの仕事に浮かれた気持ちがあった。

そして、それを八藤に見透かされ、自分が役にたってないということにも気づかされた。

「――――それはないな、アリスちゃん。だって君があの城下の生きがいなんだからさ」

「……え…？」

亜莉朱は顔をあげ、ポカンとしている。

「うん、言い方が悪かったから　誤解しちゃったね。ごめん、亜莉朱ちゃんが役にたってないとか、そう言わせるつもりはなかったんだ」

「……本当に、ですか？」

「嘘は好きじゃないからね。　少なくとも私からはそう見えるよ。城下には君が生きがいで、今＞策略者＜としてＴ－ＭＳにいる理由であるというのもね」

「“学校”にいる理由…？」

混乱する亜莉朱にあくまで推測だけどね、と八藤は続ける。

「確かに城下は優秀な＞策略者＜だよ。それだけの才もあるし、成果もあげている。だから“学校”は結構な稼ぎ場所だと思うけれど、もともと大金持ちで裕福な暮らしをしている人間がわざわざ＞策略者＜として働く理由があるのかな？」

「えっ、…それは……」

「ん、何か思い当たることでもあるのかい？」

「いえ…、でも万が一に備えてっとか…」

確かに、城下本家の右に出る権力と財産を持っている者を亜莉朱は見たことはないし、聞いたこともない。

だが……

「私の為だけ…って、いうのは…ちょっと…」

「――――有り得ないって、そう思うかい？」

八藤は少し困ったように笑い、

「城下は…ジョーカーは優秀な　＞策略者＜だ。そして、アリスちゃんは彼の幼なじみ。幼なじみっていうのならそれなりの事情…つまり、アリスちゃんの能力や両親のことについて知っていたのだと思う。もし、アリスちゃんから直接事情を聞いてなかったとしても調べればわかることだしね」

「は…はい。私、ジョーカーくんに両親の借金とか話したことなかったです。でもジョーカーくんは…助けに来てくれた…」

「話をまとめると、城下はアリスちゃんを助ける為に“学校”に入ったんじゃないかな？中学からっていう早い時期なのも、きっともうすぐアリスちゃんが研究所かなんかに引き渡されてしまうのがわかっていたからだよ」

「…じゃあ城下くんは…、初めから私を助けるつもりで…？」

このＴ－ＭＳに入学したというのか？

千人に百人の才と実力があればそれ相当の報酬を得ることができるが、成果を上げるには場合によって命の危険も伴う。

それでも――……

それでも、彼は。

「城下は優秀な＞策略者＜だよ。　でも、彼は策を練るだけで実行することは難しかったんだろう。だから＞実行者＜が大勢いるＴ－ＭＳに入学した。その結果、上手く策略をし、全て思い通りにしてアリスちゃんを助け出す事に成功した」

つまり、かなりのリスクが伴うが亜莉朱を＞能力者＜としてＴ－ＭＳに招かれるように促したのだろう。

Ｔ－ＭＳに入学したその瞬間から彼の策略は始まっていたのだ。

「じゃあ…じゃあ、何で今もジョーカーくんは＞策略者＜として“学校”にいるんですか？」

「アリスちゃんがいるから、だよ。勿論、アリスちゃんが研究所から脱出できたならＴ－ＭＳにもういる必要はないと思うけれど、アリスちゃんのこれからのことを考えたんじゃないかな」

「私の、これからの…こと…？」

八藤は小さく首を傾げる亜莉朱から視線を外し、今通っている渡り廊下からの景色を遠い目で眺めつつ答えた。

「研究所から脱出したアリスちゃんに身内はいないし、住む場所もお金もない。それに能力者として再び狙われる危険もあるのだから普通に学校に行ったり仕事をするのだって困難だろう。だから城下はアリスちゃんを自分とともに“学校”に留まらせた」

「そこまで、ジョーカーくんは…？」

考えていたというのだろうか？

亜莉朱をもう二度と、悲しませないために。

少しでも、亜莉朱が安心して暮らせるように。

「本当、見事な策略だよ。城下の思い通りじゃないか」

八藤はやれやれ、と呆れたようにため息をついた。

その仕草とは裏腹に顔は笑っていたが。

「…あのー、しぐれさん」

「ん？何だい、アリスちゃん」

「……しぐれさんって、ジョーカーくんのこと好きなんですか？」

おずおずと、聞いてみる亜莉朱。

対して八藤は一瞬面食らったような顔になり、その直後笑い出した。

「あははっ、アリスちゃん。何言ってるんだい？そんな訳ないだろう。確かに城下はモテるだろうけど、今のところ私は恋愛に興味ないな」

だから安心して？と八藤はにっこりと笑う。

「は…はいっ、て、わ私何言ってるんだろっ！ごめんなさい、気にしないでくださいっ」

顔を赤くして慌てる亜莉朱に、八藤は微笑ましそうに笑いかけた。

「城下とアリスちゃんなら大丈夫だよ。末永くお幸せにね」

――そんな二人の背後に、一つの人影が迫る――

＊　＊　＊　＊　＊

場所は変わってＴ－ＭＳの事務室。

沢山の資料とモニターに囲まれたその部屋に城下の姿があった。
　四台並べられているコンピューターの一つを立ち上げ、データに目を通している。

「……まずは、例の予告メールだけど…」

と、誰に言うわけでもなく一人呟く城下。

そしてマウスでクリックすると、予告のメールが画面に表示された。

白葉の言った通り不審な点は特に無し。

ならば…、と城下は送信先のアドレスへ目を向ける。

異様な組み合わせのアルファベットが並ぶアドレスは、犯人の手掛かりになるかと調べているが今のところは不明のままだ。

右手のマウスを動かしつつ、頭の中でまた別のことを考える。

犯人の狙いを、だ。

復讐というのだから、Ｔ－ＭＳと過去に何かあったのだろう。

城下の知る限り、これといったことは無かったはずだ。

だが――――と、城下は思う。

例えＴ－ＭＳに不正な過去があったとしても、膨大な記録から探すのはかなりの手間がかかりそうだ。

それに、第一として記録が消されている場合もあるし、もしかしたら不正な過去など端からなかいのかもしれない。

「復讐ねぇ…」

城下はメール画面を閉じ、Ｔ－ＭＳの過去記録を開いた。
蟻のように文字が連なる過去記録は今から探るだけ、かなりの時間ロスになる。
事態は刻一刻を争っているのだ。

「やっぱり、＞情報屋＜に聞くしかないか」

Ｔ－ＭＳ唯一の＞情報屋＜こと、杜遠（とおん）李。

彼女は今どこにいるだろうか、と思いつつ城下が立ち上がったその時――…。

乾いた機械音が部屋に響いた。

城下が振り返るとコンピューターの画面が起動している。

『受信メール　一件』

ｅｐｉｓｏｄｅ．６　敵と味方

「――――っ！？」

背後に人の気配を感じたのか、八藤は即座に振り返ると亜莉朱を庇うように立ちふさがった。

「しぐれさん…？」

「しっ…静かに」

不思議そうに首を傾げる亜莉朱に、人差し指を口元に当てる八藤。
　それから八藤は素早く腰に巻きつけてあるホルダーからサバイバルナイフを取り出し、肘を曲げて構えた。

人気のない渡り廊下は常に薄暗く、少し先に見える人影は誰であるか検討がつかない。

コツ…コツ…と、その何者かの足音が当たりに響く。

八藤はナイフを構えたまま、微動だにしない。

コツ……と、その足音が止まった。

「＜Ａｌｉｃｅ＞、伏せてっ！」

八藤はそう叫ぶと同時に床を蹴り、前へと跳ねた。
亜莉朱は八藤の言う通りに倒れるようにその場に伏せる。

八藤と亜莉朱のそのわずかな上下の間を、鋭いナイフが通り抜けかなりの距離を進んだ後音を立てて床に落ちた。

その間に八藤は相手との距離を縮めると、再び床を蹴り宙へ飛んだ後回し蹴りを仕掛ける。

　すると相手は左腕でそれを受けとめ、八藤の胸倉を掴むと壁へ軽々投げ飛ばした。

八藤は空中でふわりと体勢を変え、壁を勢い良く蹴って再び相手へと向かっていき、着地とともにナイフを大きく振りかざす。

　キン…ッと金属の澄んだ音が連続に響いた。

それから一歩間合いをとり、体勢を整える両者。

「――、八藤しぐれだな？」

一瞬ほどの沈黙の後、先に声を発したのは相手の方だった。

「Ｔ－ＭＳの生徒会っじゃないって言ったらここまで俺とやり合えないだろう。フツーの奴ならさっき投げたナイフで死んでたぜ？」

そう言う相手――少年は、挑発的に笑った。

「……ちょっと、手を抜いちゃったかな」

場慣れしているのか、挑発されているにも関わらず、八藤は冷静に受け答える。

「なんだと？」

少年の黒い瞳が鋭く光る。

「何って…そのままの意味だよ。君が何者か知らないけれど、私は君にかまっている暇はないんだ。先を急ぐからね――――」

そう言うと八藤は身を屈め……

――――消えた。

「……っ！？」

少年は一瞬驚き、体勢を崩したが、直ぐに持ち直し辺りへ視線を巡らせる。

しかし影と残像しか残らない八藤の動きに、為す術はない。

そして八藤の一方的な攻撃が開始され、少年は素早く防御体勢に入った。

八藤が先程よりも早く、そして力強く踏み込み、少年を追い詰める。

彼女によって操られるサバイバルナイフは段々とスピードを増し、反応できず少し遅れた少年のすぐ横を掠めた。

「…つっ…！」

少年の頬に横一筋の赤い線が伝わり、黒い髪が散る。

「ほら、足元」

先程の攻撃をかわした事により後ろへのけぞって体重を傾けていた少年に、八藤は横殴りな回し蹴りで足を蹴飛ばした。

少年はあっさりと後ろへ転倒するが、受け身をとったらしく、そのまま後ろ回りをすると素早く起き上がる。

だが――――――…

「チェックメイト」

対峙するはずの八藤と姿はなく、声がする方を向けば…

そこは、頭上。

「……な…っ！」

長い髪をたなびかせ、宙を舞った彼女はそのまま少年の方へと落下

していく。
渡り廊下の高い天井を蹴ったことにより、スピードを上げたそれは、少年がよける事を不可能に近づけ…。

八藤の勝利は確定、のはずだった。

「――残念だったな」

少年は上から迫ってくる彼女を見上げ、不適に笑うとそうつぶやいた。

その手には――――

「手榴弾……っ！？」

少年は一瞬の躊躇もせず、一気にレバーを引いた。
二人の距離は１ｍもなく、八藤はもちろん、少年自身ですら逃げ場などない。
しかし、彼はあっさりと手にした手榴弾を軽く頭上に放り投げる。

そして響いた爆発音――――…。

＊　＊　＊　＊　＊

「――――しぐれさんっ！」

爆発音のあとに煙が立ちこめる中、伏せていた亜莉朱は立ち上がり叫んだ。

「しぐれさん！しぐれさんっ！」
本来、見知らぬ相手との緊急戦闘中はＴ－ＭＳでの役割名で呼ぶのだが、そんなことには構っていられない。
煙で周りが見えず、返事も無いため八藤や少年の安否すらわからない。

その時、

「しぐれさ――っ…！」

そんな亜莉朱の背後から、何者かの手が伸び、彼女の口を塞いだ。
亜莉朱の顔に緊張が走る。

「――こんな中で叫んだりしたら、ダメだよ。敵に自分の場所を知らせることになるから」

続けて聞き覚えのある声が聞こえ、亜莉朱の顔が徐々に安堵へと変わっていく。

彼女の口を塞いでいた手が外され、振り向くと…。

「ジョーカーくんっ」

亜莉朱の目の前には城下が立っていた。

「うん、怪我はない？アリス」

「わ、私は大丈夫だけど…そうだ、しぐれさんが…っ！」

再び慌てる亜莉朱。

「八藤なら平気だよ、ちゃんと訓練もしてあるから。素人ではないんだし」

「でも…っ！」

亜莉朱は見ていたのだ、手榴弾が間近に迫った八藤の対応を。
八藤は怯みもせず、サバイバルナイフを構えたまま手榴弾へ向かっていったのだ。

＞ｈｅａｒｔ＜や＞ｄｉａｍｏｎｄ＜などの実力者の役割をしている者は常に防弾加工された制服を着ている。
だが八藤は弾丸よりも速く動けるという身体能力を持ち合わせているため、その制服を着ることは滅多にない。

防弾加工された制服が爆発に耐えきれるという保証はないが、普通のセーラー服よりは外傷は少ないはずだ。

だか、八藤は着ていない。

「しぐれさん、あんな近くから爆発受けたんだから大丈夫なはずないよ…っ」

そんな彼女をなだめるように城下はアリス、と呼んだ。

「だから、八藤は大丈夫だよ。———それにあの人も、助けに行ったみたいだから」

城下はそう言うと、前方へ視線を投げた。

「……え、それって…？」

視界を覆っていた、白い煙が段々と晴れていき……。

学校長こと西本白葉が必然のように、そこにいた。

episode．7　世界観、解明（1）

「いやー、危ない危ない。学校内でこんな爆発物使われるとはね～冷や冷やしたよ」

振り上げた左足のローファーの裏で八藤のナイフを受け止めつつ、少年と八藤の間に立って淡々ととそう語る白葉。

結果だけ表すと、三人とも無傷であった。
手榴弾が爆発する寸前に白葉は二人の間に飛び込み、手榴弾をさらに上へと蹴り飛ばしたのだ。そして靴底で八藤のナイフを受け止めたという。

「まぁお陰で天井崩れちゃったけどねーっ、あはははっ！」

そう言って白葉は脳天気に爆笑するが、誰一人としてそんな気分ではない。

「学校長」

「はぁ～いっ？何かな八藤っ」

白葉は八藤がナイフを引くと同時に足を下ろし、彼女へと振り向く。
対して八藤は目の前にいる白葉を通り過ぎて、少年へ視線を投げた。

「此処のセキリュティはどうなっているのですか？部外者が侵入しても警報は鳴らないし、それに手榴弾などの登録されていない武器

は探知機に引っかかるはずですよね？」

「うーん、まぁそうなんだけど～。彼、部外者じゃないしぃ」

そう言うと白葉は横目で少年をみた。

薄暗かった廊下が天井が崩されたことにより、昼間の明かりが差し込んで少年の顔がはっきりと見える。黒い短髪に、漆黒の鋭い瞳。そしてＴ－ＭＳの学生服である黒の襟詰めを着ていた。

「おーい、城下ぁ～アリスちゃーんっ！」

それから白葉は少し離れた場所にいる、城下と亜莉朱を呼ぶ。

二人が到着すると、白葉は少年の横へ並んでにっこりと笑った。

「じゃ、自己紹介して！彼らがこのＴ－ＭＳの生徒会メンバーだからっ！」

白葉に促されるように、口を開いた少年は

「はじめまして。本日よりＴ－ＭＳのロイヤルメンバー及び、実力者（diamond）の代安ルキトです。よろしく」

そう言うと不適に笑った。

＊　＊　＊　＊　＊

「――というわけで、本部の生徒会がどれほどの実力者か試してみたわけ」

場所は変わって学校長室。

城下と亜莉朱、八藤はソファに、白葉は例によって高級そうな椅子に座りつつ少年――代安ルキトの話を聞いている。

八藤はまだ警戒心が抜けていない様子で、テーブルを挟んで合い向かい座る代安を睨んでいた。

その隣に亜莉朱が座っていて、心配そうに八藤を見ている。

さらにその隣に座る城下は無関心のようで、黙って話を聞いているだけだ。

「てわけで、彼は敵じゃないんだよーっ！わかったっ？」

話が終わり、白葉がそうまとめた後、八藤が口を開いた。

「ですが、本部のロイヤルメンバーには戦闘に対応できる者だけではありません。たとえ命はとるつもりがなかった行動とはいえ、危険なことは慎んで貰いたい」

「うーん、まぁそうなんだけど～。代安がどうしてもっていうからねー。最近これといった事件もなかったから八藤の腕も鈍っちゃうだろうし、丁度良いと思って」

「私が聞いているのはそんな事ではありません。今回は私がいたから良かったにしろ、もし非戦闘メンバーのみの場合だったならどうするのですか？」

「…もしアリスちゃんが1人でいたら、ってこと？」

先ほどまでハイテンションだった白葉が、声のトーンを落として静かに、そして鋭く言った。

「八藤、見くびりすぎだよ。学校の支配者（ruler）がちゃんと生徒の事を考えていないとでも思っているの？」

「ですが…」

「それに非戦闘メンバーとかいうけどさ、はっきり言って失礼だよ。アリスちゃんに対しても、他の＞実力者＜以外の役割の人に対しても」

睨み合う二人に亜莉朱が慌てて割って入る。

「ま、待ってください白葉さんっ！しぐれさんは私を心配してくれているだけですよっ」

「――でも、それはアンタが一番気にしてることなんだろ？」

代安がぽつりと、何気なく、でも確信したようにそう言って不適に笑った。

「しぐれさんは私を心配してくれただけですっそれを悪く言ったりしないでくださいっ！」

亜莉朱は思わず身を乗り出し、噛みつくように代安に言い返した。

「でも、アンタが気にしてることだよな？」

「……っ、」

見透かしたように再び断言する彼に、亜莉朱は言葉に詰まる。

「それでもアンタは、気にしないっていうのか？アンタの隣にいる奴も貧弱そうだし。お気楽なもんだな、生徒会（ロイヤルメンバー）って」

ふいに、パンッと

頬を叩く音が、

部屋に響いた。

「あなたに、そんなこと…っ、言われたくないっ！」

震える声で、亜莉朱は言う。

「確かに私は…っ、あなたみたいに戦闘に役立てるような人間ではありません…っ。でも…、こんな私でも必要としてくれる人がいました。助けてくれる人がいました」

懸命に、言葉を紡ぐ。

「――そして、心から…愛してくれる人がいました。彼らがいて、私に居場所を作ってくれたから…私はここにいられるんです。だから…、だからあなたなんかに悪く言われたくない…っ！」

その場に立ち尽くし、涙を零す亜莉朱。

部屋はしばらくの間静まり返えり、それまで座っていた城下がゆっくりと立ち上がった。

「ありがとう、亜莉朱。もういいから座って。ね？」

そう言うと彼は後ろから亜莉朱を抱きしめ、それからソファへと座らせる。

俯き、まだ涙を零す亜莉朱の頭を撫でた後、城下は代安へ視線を投げた。

両者が目を合わせたまま、再び沈黙が続く。

「……代安、僕のアリスを泣かせないでくれる？」

重い沈黙の後、城下がそう言うと代安は拍子抜けしたような顔をした。

「はぁ…、その子…アリスちゃんってキミの彼女なわけ？」

「僕の話聞いてる？アリスを泣かせるなっていってるんだけど」

淡々とした彼の物言いに、代安は気を悪くしたようで睨みつけるが、城下は気にも止めない。

すると代安は諦めたように溜め息をつき、亜莉朱の方へ視線を向けて

「――わかったよ。俺が悪かった、言い過ぎた」

と言った。

「……」

亜莉朱は俯いたままだったが、涙は止まったようだ。

「そういえば、僕達自己紹介がまだだったよね」

ふいに、城下が言った。

「そだねーっ！みんな、代安に自己紹介してあげてっ！じゃあまず

八藤からっ！」
　白葉が口を挟み、八藤が乗り気でない様子だが促されるまま口を開いた。
「高等部3年の八藤しぐれだ。　役割は実行者（heart）」
当たり障りのない八藤に城下が続ける。
「僕は1年の城下乃愛。役割は策略者（joker）。
で、彼女が亜莉朱。同じく1年、役割はこのＴ－ＭＳ唯一の能力者（Alice）だよ」
城下が亜莉朱の自己紹介まで終えると、代安が口を開いた。
「そうそう、海外研修にも＞能力者＜っていなかったんだよな。
亜莉朱ちゃんの能力ってどんなものなんだ？」
「アリスの能力は＞真実の瞳＜で　人の言っている事が嘘か本当かがわかる」
　城下があっさりと答える。
「例えば――…、ねぇアリス？もう大丈夫？」
「…うん、平気」
城下が振り返り、隣にいる亜莉朱に声をかけると亜莉朱が顔を上げた。
「ちょっと眼鏡、外してくれる？」

「う、うん」

城下に言われるがままに、亜莉朱が眼鏡を外す。

「じゃあこれから、アリスに聞かれたことについて答えてみて。もちろん嘘も交えて」

「わかった」

城下の言葉に代安がそう返事すると、城下は亜莉朱にじゃあよろしく、と言った。

亜莉朱は小さく頷き、代安へ視線を向けた。

「――あなたの生年月日は？」

「９月１８日」

「――あなたの出身地は？」

「アメリカ」

「――あなたの血液型は？」

「Ｂ型」

「――ダウト、」

代安が答えたあと、亜莉朱がぽつりと言った。

「嘘、ですよね？」

亜莉朱がそう続けると、代安が大袈裟に驚きながらのけぞった。

「へぇ、すげーな亜莉朱ちゃん。　お兄さんビックリだわ」

そんな態度の彼に亜莉朱はクスッと小さく笑った。

その後すぐさま白葉が立ち上がる。

「じゃあ次あたしが自己紹介！　西本白葉、ここの学校長で、役割は支配者（ruler）！！

で、特技は変装だよ～んっ！よろしくっ」

そう言うとこう続けた。

「自己紹介も終わったことだしぃ～っ！早速本題に入ろっ！ね、城下」

白葉のその言葉に城下は少し驚いたようだったが、呆れたように溜め息をついた。

「わかってたんですか？僕、何も言ってないんですけど」

「うん！だって事務室にいた城下がアリスちゃん達がいた場所に偶然通りかかったて言うのは確率としては低いしぃ。それに何かあったなら渡り廊下を過ぎて学校長室に来れば全員集められるしね」

淡々と楽しそうに白葉は語る。

この学校長にはなんでもお見通しである。今に始まったことではな

いが。

「まぁ、そうなんだけどね。――ついさっき事務室のパソコンにメールが届きました」

城下のその言葉に、部屋の誰もが息を呑んだ。

「誰から？」

「先日のメールアドレスとは違うものでした。しかし同一人物である可能性が高いかと」

白葉の質問に城下が丁寧に答える。

「どんな内容だったの？」

「『―もうすぐ崩壊が始まる。　始まりのベルを聞き逃すな。我は必ず、この世界を破壊してみせる。覚えておくがよい、＞策略者＜。お前の世界はすでに崩壊を始めているということを』」

城下が言い終わるとそれまで黙っていた八藤が口を挟んだ。

「…つまり、犯人の狙いの先は…城下ってことなのかい？」

「……否定はできないね」

「そんな…っ、」

城下の言葉に亜莉朱が小さく声を上げた。

「だ、大丈夫なの？ジョーカーくんっ」

「まだ相手の目的がわからないからね。でも、一応用心はしておくよ」

彼の言葉にはフォローが入っていたようにも聞こえるが、亜莉朱の顔は不安げなままだ。

「それに、僕だって非常事態に全く戦えないわけじゃないから。心配いらないよ、ね？」

「でも…っ、」

「だが城下、本当に用心しておいてくれよ。ここに＞策略者＜は君しかいないのだから」

口ごもる亜莉朱に続けて八藤が言う。

「わかってる。平気だよ、僕はリタイアなんかしない」

静かに、しかしはっきりと、彼は断言した。

ｅｐｉｓｏｄｅ．８　世界観、解明（２）

学校長室から解散し、城下は教室が並ぶ廊下を歩いていた。

自分のクラスへ向かう為である。　目的はただ一つ、＞情報屋＜から情報を得ること。

時間が限られている今、＞情報屋＜を頼る他に術はない。

しかし教室に到着したはいいものの、肝心の杜遠李はいなかった。

近くにいたクラスメートに聞いたところ、

「え？杜遠さんなら、一限目の授業でどこかの教室へ移動してたみたいだけど…」

もう一限目終わったから、教室へ戻ってくるんじゃないかな？とクラスメートは続ける。

「わかった、」

城下は短く答え、続けて礼を言い自分の席へ向かった。

基本的にＴ－ＭＳはクラスは同じでも役割によって時間割が違う総合学科なもので、この様な事は珍しくない。

席に着いた城下は持ってきていたノートパソコンを机の上に置き、電源を入れた。

あらかじめ事務室のパソコンから先程のメールを転送しておいたので、それをデータに保存する。

それから李の到着を待つ時間も惜しいので、情報を集めることにした。

待つこと何分か過ぎ――――――……。

「きゃーっ！二限目遅れるぅーっ！」

二限目の授業の為それぞれ移動したのか、何時の間にか城下独りしかいない教室に李が飛び込んできた。

それと同時に二限目の始まりを告げるチャイムが鳴り響く。

「って、城下くん！？何故ここにいるんデスかっ！？」

李は城下に驚いたのか、持っていた荷物を後ろへ吹っ飛ばすほどのオーバーリアクションをした。

「うん、ちょっと杜遠に＞情報屋＜として働いて欲しいことがあって」

「えぇ～っと、なにか事件でもあったんですか？」

李が戸惑った様子で笑いながら、城下に聞く。

「そうだよ。今回はちょっと時間を争うから、杜遠から情報を貰えるかなと思って」

「そ、そーなんですかっ！　わかりましたっ協力しますよ！」

李が顔を赤くしながら、大きな声で返事をする。
城下と話す時はいつもこんな感じなので、城下自身は気にしていないが。

「ありがとう、助かるよ」

「いえいえっ！あ、場所変えますか？」

「ううん、いいよここで。誰もいなし。あと杜遠、次の授業は行けないけど平気？」

「えぇ、大丈夫ですよ。次の授業は得意分野ですからっ」

そんなやり取りをしつつ、二人は机を向かい合わせた。

城下は李に今回の状況をざっと説明し、そして過去の自分になにか関わる事はないかを聞いた。

「うーん、そうですねぇ…。城下くんは基本的にほとんどの活動において活躍してますから…」

首を小さく傾け、頭を悩ませる李。

「あえて言うなら、城下くんを知られてる訳だから直接城下くんが現地に出向いた事件が一番確率が高いのではないですか？」

「そうだね、僕は基本的に策略を指示するだけで現地に向かうこと

はあまりしないし」

「ですから、大きく挙げると三つありますね。
一つ目は、４年前の『情報偽造事件』これにより、Ｔ－ＭＳ生徒一名が死亡。二つ目はその翌年の『能力者救出作戦』Ｔ－ＭＳ生徒、一名転入。三つ目は半年前の『１５時間立てこもり事件』怪我人、死者なし。――――以上ですね」

李は真面目な面持ちですらすらと言葉を発する。持ち前の記憶力は完璧らしい。

「確率的には、この三つの事件が当てはまるかと。『能力者救出作戦』以外はここで起こった事件ですし、他の事件は事後処理はある程度の段階まで終えています」

「第一に『情報偽造事件』で死亡した生徒ですが、犯人だったらしく、拷問による死亡だそうです。
犯人に両親はいなく、まだ幼かった妹は施設に預けられていたらしいです。ですから彼女は事件を知らないと思われます」

続けて述べる李に城下が答える。

「つまり、彼女の復讐の意志はない可能性ほうが高いってこと？」

「そうですね。恐らく学校側が根回しをして彼女に真実を知らせなかったと…」

そう言ったところで、李は気まずそうに言葉を切った。あまり、気分の良い話では無いからだろう。

「す、すみません。続けま…」

「Ｔ－ＭＳは平和を守るんじゃなくて、保つ為にあるんだ。だから例えどんなリスクがかかっても、世界中を騙す事になっても。僕は止まることは出来ない。僕はここにいる限りそう思っている」

つい私情を挟んでしまい、慌てて取り繕うとした李だったが、城下が何気なく声を発した事により制された。

彼は、語る。

まるで、唄うように。

「僕はこれから世界を騙す。策略して最終的に全てを覆すんだ。だけど、杜遠は違うんでしょ？真実を知るのなら例えどんな出来事が起こっても、世界中の誰もが忘れたとしても、杜遠だけは覚えていて」

そして彼の言葉に、

俯いていた彼女は、

ゆっくりと顔を上げ、

「はい、わかりました」

と、小さく微笑んだ。

まるで、全てを吹っ切ったかのように。

「――では、続けます」

＊　＊　＊　＊　＊

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

一方その頃、反対側の第三校舎にて。

廊下を並んで歩く、亜莉朱と代安の姿があった。二限目の授業が始まっているらしく、廊下に人気はない。

亜莉朱は気まずそうに視線を辺りに泳がせていた。先程叩いてしまった手前、話しかける勇気はない。対してその隣を歩く代安は気楽にズボンのポケットに入れているウォークマンで音楽を聴いていた。

どうしてこの様な状況になったかと言うと――…

『あっ！ちょっと来て～、アリスちゃん』

先程の学校長室で解散後、八藤と連れ添って出て行こうとした亜莉朱を白葉が呼び止めた。

『はい？なんですか？』

亜莉朱は振り返り、再び白葉のもとへ。

『うん、あのね～アリスちゃん。代安に学校内の案内をして欲しい

んだけど…』

『え、あの、私、しぐれさんとの見回りがあるんです…』

亜莉朱が遠慮がちにそう言う。

『そっかぁ！あ、でも八藤1人でも大丈夫っしょ？八藤に案内させてもいいんだけど、そうするとアリスちゃん独りになっちゃうから危ないしぃ～。ね、お願い～』

椅子に腰掛けたまま、拝むように両手を合わせる白葉。

『――はい、了解です』

亜莉朱は小さく頷いた。

しかし白葉がそんなことをしなくても、結局は彼女の言うとおりにすると決まっている。

何故なら…

彼女は、ここの“学校長”であり＞支配者＜なのだから。彼女の命令は何があっても、絶対である。

『ありがとっ！ついでに見回りもしておいて、ルートはこれでねっ！』

白葉は亜莉朱の返事に満足したように笑いつつ、亜莉朱に折り畳んだ薄桃色のメモを渡した。

メモには学校内の案内ルートと紹介するべき人物及びその居場所が

書いてあった。

『はい、では代安くん行きましょう。失礼します』

『うん、じゃあよろしく～』

――そして、現在に至る。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

学校長室から解散して約１０分。
特に話すこともなく、そしてまだ１つ目の目的地にも着いていない
為、沈黙が続いている。

「……あのっ」

「……ねぇ、亜莉朱ちゃん」

ついに言葉を発した亜莉朱だったが、代安も同時に声を出したため
イマイチ決まらかった。

「……えっと、な、なんでしょうか??」

「ん、亜莉朱ちゃんから先に言っていいよ?」

「いえ、私は大した用事ではないので…代安くんがお先に」

そう言って先を譲る亜莉朱に代安はあっさりと承諾し、先手を取った。

「まぁ、俺も大した用じゃ無いんだけど…さっきふと思ってさ。亜莉朱ちゃんってフルネームなんて言うの？さっきの自己紹介の時に名前しか言わなかったじゃん？」

「あ、名字ですか？城下ですよ。城下亜莉朱（しろした ありす）」

「城下って確か＞策略者＜と同じ名字だったよな？」

「はい、そうですよ。私、ジョーカーく…城下くんのお姉さんの娘なんです」

話題が見つかり一安心の亜莉朱はしっかりと代安に受け答える。

「え、でも亜莉朱ちゃんと城下って付き合ってんだろ？大丈夫なわけ？？」

「大丈夫ですよ。城下くんのお姉さんとは実際に血のつながりはないので、養子みたいなものです。
身寄りがない私の保護者になってくれたんです」

「…ごめん、なんか悪いこと聞いた」

「えっ？そんな事ないですよ？」

亜莉朱は不思議そうに首を傾げる。

「結果的に両親と別れることになりましたが、私はこれで良かった

と思います。今、とても幸せですから」
そう続けると亜莉朱は小さく微笑んだ。

――あの冷たい、
コンクリートの
光すらない、
部屋よりずっと

――彼等が救い、
そして与えてくれた
この世界はあまりにも
眩しくて、

「ですから、私は後悔なんてしていません。少しも悲しくないって
言ったら嘘になるかもしれないけれど、それ以上に幸せなんです」

「そっか、」

亜莉朱の言葉に納得したように代安はそう言うと、笑った。

「で、亜莉朱ちゃん」

「はい？」

「次は亜莉朱ちゃんの番、なんか言いかけたでしょ？」

「ぁ、はい。えっと、あの…、　さっきは酷いこと言って、ごめんなさい」

突然の謝罪に代安は少々面食らったような顔をしたが、すぐ笑顔に戻り

「なんだ、そんなこと気にしてたんだ？もういいよ、普通に俺が悪かったし」

「…でも初対面の人なのに失礼なことばかりしてしまって…」

俯き加減でそう言う亜莉朱。

「確かに私はロイヤルメンバーとして役に立てないけど、他の城下くんやしぐれさんまでも同じように言われて…つい。すみませんでした」

「いや、本当に俺が悪かったんだってば。それに――――」

代安が困ったようにそう言うと不意に声を潜めた。

「亜莉朱ちゃん可愛いからついいじめたくなっちゃったんだよね♪」

「……え？」

亜莉朱は代安の言葉に目をぱちくりさせ、呆然とする。

それから少し考える風にして、

「でも、しぐれさんの方が美人ですよ？それに城下くんだってたまに女の子に間違われるくらい綺麗ですし」

「おいおい。八藤はともかく俺に男の城下を勧めるなよ…」

代安は亜莉朱の発言に冷や汗をかくが、当の本人は天然全開らしく意味がよくわかっていないようだった。

埒が明かないと考えた代安は話題を変える。

「そうそう、もう一つ聞こうと思ってたんだけど、あの学校長サンって歳いくつなわけ？」

「白葉さんですか？Ｔ－ＭＳの高等部卒業らしいんですけど、留年を何回も繰り返してるらしくって…本当の年齢は誰も知らないんですよ」

恐ろしいことに、あの外見は何年たっても変わっていないらしい。

「それに、白葉さんは変装が得意で。もしかしたら、あの格好は変装かもしれないっていう噂もあります。性別もはっきりしてないらしいし」

「うわー…。確かに俺が海外研修してた時もあの学校長サンと同級生って奴何人かいたけど、みんな年齢バラバラだったよなぁ」

遠い目をして代安がぼやく。

そんな彼を見て、亜莉朱は小さく吹き出した。

【第二章　崩壊、開始】　ｅｐｉｓｏｄｅ．９　崩壊、開始（１）

場所は変わって学校長室。
中では椅子に腰掛けている白葉と立ったままの八藤がいた。

「えーと、八藤？」

そのまま数十分は過ぎていたらしく、白葉が痺れを切らしたように声をかけた。

「なんですか？」

八藤は無表情に即答する。

そんな彼女にあはーと白葉は苦笑いをすると、肩をすくめた。

「もう第二校舎の視察が終わったんだ？」

「はい、一応見てまわりました。不審物はありません。しかし他の生徒達にはまだ伏せている件なので、使用している教室までは詳しく出来ませんでしたが…」

「ううん、いいよ。もし不審物があったら生徒が気付くだろうしぃ。大丈夫大丈夫♪」

白葉はそう言うとにっこり笑った。

「基本的に第二校舎は特別教室しかないからね。使わない時は人気

はないし、爆発物しかけるならちょっと確立高いと思ってたんだけど」

「――だから私に任せた、と？」

「うん、まぁそういうことだね。城下は他にすることあるし、アリスちゃんは論外。代安は今日来たばっかで、学校内のことはよく知らない」

白葉は軽くそう答えて、

「で、こんな話をしに来たわけ？？」

と話を切り替えた。

「いえ、違います。少し、お聞きしたいことが」

「ふーん、何かな？」

表情を全く変えないハ籐にかまわず、笑顔で聞き返す白葉。

「…ここの教員達は、どこへ行ったのですか？」

「……」

一瞬だけ沈黙する白葉、しかしすぐに口を開いた。

「…よく気づいたね」

「朝のＨＲ、どのクラスもばらばらな時間で終わった。…あなたが、全クラスに渡って教師の振りをしていたからではないのですか？」

「……」

「あなたは何を、隠しているのですか」

「それは――――」

白葉が口を開く。

――その時、

ドォォオン！！

「「…っ！？」」

２人は顔を見合わせ、すぐさま窓へと駆け寄った。

八藤は窓を開けて身を乗り出す。

「八藤、見える？」

八藤よりも背の低い白葉が隣で聞いた。

「はい、大体は」

学校長室があるここは第二校舎で、平行に並ぶ第一校舎とは合い向かいの位置にある。

だが、第一校舎からは煙や外傷は見当たらない。

つまり可能性としては第三校舎なのだ。

第三校舎は第一、第二校舎に垂直に並んでいるためここからではよく確認出来ないが黒い煙が微かに見えている。

「第三校舎…？」

八藤が呆然と呟いた。

それからすぐ我に返り、

「学校長っ、第三校舎にはアリスちゃんと代安が！」

白葉に振り返って八藤は言う。

「そうだね、でもまた爆発するかもしれないよ？近づかない方がいい」

「ですが…っ！」

「助けたい気持ちはわかるけど、あたしも馬鹿じゃないから。死にに行かせるわけにはいなかいよ」

あえて冷淡に白葉は言い、窓からから離れると椅子に戻った。

「ではどうするのですか！こうしている間にも、第三校舎は崩壊が始まって中の生徒達が危険な状態になっているのに！」

八藤は堪えきれない様子でそんな白葉に怒鳴りつける。

「あと一分」

「……え？」

「あと一分待って爆発が起きなかったら、いいよ。第三校舎に行くなりなんなり好きにすればいい」

白葉はそう言い放つと椅子を回転させ、デスクへと向かった。

既に起動していたパソコンには、いつの間にかメールの受信が表示されていた――――…。

＊　＊　＊　＊　＊

――どうすればいいのか、わからない。

亜莉朱は煙が舞い、硝子が飛び散った廊下に座り込んでいた。
そう。学校案内もスムーズに進み、最後の教室へ移動しようとした時だった。
危ないからと亜莉朱より少し先に向かっていた代安が、教室から飛び出してきたのだ。

『＞Ａｌｉｃｅ＜っ！』

血相を変え、代安が走る。
それと同時に代安の背後の教室から爆発音が鳴り響き、炎と共に煙が巻き起こった。

『え…っ』

呆然と立ち尽くす亜莉朱。

『逃げろ！早く！！』

代安は自分の背後に迫る炎をかわしながら走りつつ、亜莉朱に叫ぶ。

最初は炎こそ、彼女の居場所まで届いていなかったものの、次々と爆発が起こったため徐々に規模が広がっていた。

二人の距離が近づくと同時に炎は亜莉朱に迫る。

『逃げろ！――＞Ａｌｉｃｅ＜！』

とうとう亜莉朱がその場から動けないまま代安と、炎に飲み込まれる。

硝子の激しく割れる音が響く。

しかし間一髪で代安は亜莉朱を抱え、その場に倒れ込んだ。

『ぐ…っ』

代安が低い声を上げる。

爆風ともに炎は２人の上を通り過ぎたが、亜莉朱を庇った代安の背中全体に強烈な熱と激痛が走ったのだ。

『＞ｄｉａ＜！？』

亜莉朱はそう言って慌てて起き上がろうとするが、代安は動かず返事がない。

『＞ｄｉａ＜…！＞ｄｉａｍｏｎｄ＜ッ！？』

抱えられた状態なので、顔が見えない。

『やだ…っ、返事してっ！』

しかし代安からの返事はない。ぐったりと体重を亜莉朱へ預けたまま、彼は動かない。

『そんな・・・っ嫌ァ――――ッ！』

＊　＊　＊　＊　＊

爆発の直後にて。

薄暗い教室の窓側に、誰かが立っている。

炎が吹き出て煙の上がる第三校舎を眺め、その人物は怪しく笑った。

ｅｐｉｓｏｄｅ．１０　崩壊、開始（２）

――――どうして、

こうなってしまったのだろう？

「私の…せいで…ッ！」

硝子が飛び散り、壁は焦げ、崩れている惨状の中で亜莉朱は悲痛な声を上げる。

なんとか壁に寄りかかるようにして座らせた代安は頭を伏せていて顔をあげることはない。

またこの場所でいつ爆発が起きるかわからないが、代安をここに残して逃げるわけには行かない。

亜莉朱はなんとか冷静になろうとし、連絡手段を考える。

「そうだ、携帯…っ」

亜莉朱は特別にＴ－ＭＳ特製の薄い携帯電話を与えられていた。

淡い桃色の携帯電話は簡単なメール機能と、電話、自分の居場所が知らせられるもので常に仕事中の連絡手段用にと持ち歩いている。

しかしスカートのポケットに手を入れるが、携帯は見つからない。
亜莉朱が慌てて周囲を見渡し、桃色の破片に目を留めた。
「うそ…っ」
破片のそばには溶けて原型を留めない桃色の物体と、焦げた小さなぬいぐるみのストラップが転がっていた。
連絡手段は、もうない。
亜莉朱が絶望しかけた、

――その時

「アリスちゃん！代安！」
ふと聞き慣れた声が遠くから聞こえてくる。
顔を上げると、廊下の反対側から誰かが駆けてきていた――――――。

＊　＊　＊　＊　＊

時間は戻り、爆発の数分前。

「以上が、『情報偽造事件』『能力者救出作戦』『１５時間立てこもり事件』についてのデータです」

城下と李がいる教室。
中では長々とハイスピードでデータを語った李が一息つき、城下は頭へ暗記したデータをノートパソコンでまとめていた。

「流石だね杜遠。助かるよ」

「いえいえっ！城下くんこそ、私が話した記録はすぐ暗記してますし！すごいですよっ」

照れくさそうに李が言う。

「じゃあこれをまとめると…」

と、パソコンの画面を見ているため李の表情に気づかない城下が話し出す。

「やはり『情報偽造事件』と『能力者救出作戦』は今回の件での関係は確率的に低くそうだね」

そんな彼に残念そうな李だったがその言葉には頷いた。

「そうですね、今回は“復讐”がキーワードですし」

「よくわったね」
城下は顔を上げないまま、答える。
「いえ、それほどでは…『15時時間立てこもり事件』は犯人からしてみれば、失敗のようなものですし計画を立てた城下くんへの復讐の意志が高いかと…」
すらすらと得意気に続ける李だったが…
「うん、もういい。わかったよ」
ふと、城下が遮った。
「……？なにが、わかったんですか？」
李が問いかけるが城下は答えない。
「『―もうすぐ崩壊が始まる。　始まりのベルを聞き逃すな。
我は必ず、この世界を破壊してみせる。
覚えておくがよい、＞策略者＜。
お前の世界はすでに崩壊を始めているということを』」

「…城下くん？」

「薄々思ってたんだけど、これでやっとはっきりした」

「え…っと、何がですか？」

そんな李に城下はパソコンから顔を上げると、彼女に視線を向け、口を開いた。

「――――このメールを送ったのは、君だってことがだよ」

その直後、遠くから凄まじい爆発音が鳴り響く――――。

ｅｐｉｓｏｄｅ．１１　崩壊、開始（３）

「アリスちゃん！代安！」

崩れて立ちはだかる障害物をよけながら、八藤が亜莉朱と代安の元へ駆けてきた。

「しぐれさんっ」

亜莉朱が慌てて立ち上がる。

「何があったんだい？爆発の音が聞こえて…」

「あの教室からいきなり…っ！それで代安くんが…っ」

「代安？」

八藤は、壁に寄りかかり座り込んでいる代安を見つけハッとする。

「危ないからって代安くんが私より先に進んで確かめてくれてたんです…っ。それでさっき爆発が起こって私をかばって…」

今にも泣き出しそうな声で、亜莉朱がいう。

「アリスちゃん、落ち着いて」

八藤は亜莉朱に優しくそう言い聞かせると、代安の元へと近づいた。

「代安、聞こえるか？」

代安の前に片膝を付き、顔を寄せて八藤が言う。

「…――」

亜莉朱の位置からは聞こえないが、代安は微かに口を開き、何かを言ったようだ。

八藤はそれを聞き取り、亜莉朱に振り返る。

「アリスちゃん、代安を医務室まで運ぶよ。手伝って」

「あの…代安くんは…？」

亜莉朱は不安そうな顔で問いかけた。

「大丈夫。意識はあるし、脈も安定している。だけど背中に酷い火傷をしているから急がないと…」

すると、三人の背後でガラッと物音がした。

「あ…っ！さっきの教室にも確か何人か生徒が…」

「そうだね。でも代安を運ばなくてはならないし…っと、」

ふとどこからか落ち着いたメロディーが流れる。

音の発信源は八藤の腰に巻いたホルダーからのようだ。

ナイフや銃などの武器を引っ掛けている他、外ポケットには携帯電話を入れていたらしい。

「ちょとごめん」

八藤はシルバーの携帯を取り出すと、亜莉朱に背を向けた。

「はい、こちら＞ｈｅａｒｔ＜。爆発現場は第三校舎３－Ｒ１、現在負傷者は＞ｄｉａ＜一名確認。今から＞Ａｌｉｃｅ＜と医務室へ向かいます」

相手はおそらく学校長だろう。八藤は簡素だが丁寧な言葉使いで話している。

「それから現場の教室内に何名か生徒が残されています。そこまで手は回らないので応援を…はい、…ではまた連絡します」

そう言って八藤は電話を切ると、振り返った。

「じゃあ行こうか、アリスちゃん。そこの教室には後で応援がくるから大丈夫だよ」

「……はい」

八藤のその言葉に亜莉朱は感情を押し殺して返事をした。

今までの経験上、知っていたのだ。

あの教室の生徒達はきっと助からない、応援は来るのは全てが終わった頃に生徒を助けるのではなく、ただ回収しに。

わかっては、いた。

今まで何度も見てきたのだから。

「――酷いことだとはわかっているよ。だけど、それがこの“学校”の掟だから」

何気なく、誰に言うわけでもなさそうに八藤が言った。

「そこの生徒は爆発物―不審物に気付かなかった。所詮自己責任で学校側は片付けてしまう。ここで生き残るのは、強いものだけなのだからね」

――それは、

どんなに不利な事だろう？

皆が対戦闘向きとして教育されているわけではない。

それぞれの役目があるのだ。

それに加えて常に神経を張り巡らせて周りの状況を知り、自分の身を守らなければならない。

――それは、

どれほど集中力が必要だろう？

このＴ－ＭＳに＞策略者＜と＞情報屋＜が少ない理由。

才が足りなかったのでも、能力が足りなかったのでもない。

ただ、自分の役割を果たしつつふとした事で集中力が切れ、そこで終わってしまっただけのこと。

人類には限界がある。

再び代安に近寄り自分の肩を貸して彼を立たせている八藤を目で追いながら、亜莉朱は思う。

――例えば、城下乃愛。

彼は現時点でＴ－ＭＳ唯一の＞策略者＜だ。もちろん彼も何度も危険な体験をしているだろう。

それでも、彼はここにいる。危険を百も承知で。

――最も不利な状況で。

「・・・・・・っ、」

亜莉朱は唇を噛み締めた。自分には何も出来ない。

否、何もしていない。

なのに未だに生き延びている。
それは、周りの人間を犠牲にした上での結果だ。
「私は…いつも守られればかりで、本当に…」
最低だ、と亜莉朱は思わず声に出してしまう。
微かな声だったので聞こえないと思ったが、代安を支えて立ち上がった八藤がふと振り返り、
「アリスちゃんはいい子だよ。　とても素直な、いい子」
と、優しく微笑んで言った。
「え・・・？私は、そんなっ」
「あたしの方がよっぽど最低だよ。…今こうやって、あの教室の生徒を残して…ここから去ろうとしている」
「・・・で、でもそれはしぐれさんが悪いわけじゃ・・・」
八藤は再び前を向いて、
「…いや、あたしは酷い奴だよ」
と言った。

亜莉朱は慌てて立ち上がり、八藤の後を追う。

「そんなことないです！私の方が…っ最低なんですよ！いつもいつも、守られてばかりで…っ！現に代安くんがこんな目にあってるじゃないですか！！」

「仲間を助けるのは当然だろう？それに代安は生きているじゃないか」

「でもっ！私は何もしなかった！何も出来なかった…っ！こんなっこんな私は守られる資格なんてないっ」

仲間を助けられなかった自分が許せなくて。

何も出来ない自分が悔しくて。

もう自分は仲間を傷つけてまで生きていていいのか、

もう、わからない。

「――それでも、あたしはアリスちゃんと代安が生きていてくれてよかったと思っている」

振り向かないまま、八藤が言う。

「え……、」

「酷い奴だろう？自分の身近な人間の安全しか考えていない。とりあえず2人は助けられたからと、安心している自分がいるんだ」

「しぐれさ……」

「それでもあたしはアリスちゃんと代安が生きていてくれて、よかった。本当に。

君達が死ななくて、よかった」

八藤がそう言って微笑むと、

亜莉朱は泣きそうな、

でも嬉しそうな、

そんな笑顔を浮かべた――。

？

ｅｐｉｓｏｄｅ．１２　地獄の番人（１）

「うそ…っ」

第二校舎医務室にて。
亜莉朱の呆然とした声が、白く清潔感のある部屋に響く。
向かい合う八藤と亜莉朱の隣のベッドには上半身を包帯で巻かれた姿の代安が腰掛けている。
医務室には現在誰もいなく、静まりかえっていた。

「嘘じゃないよ。城下が、犯人を見つけたらしい。さっき連絡があった」

八藤があえて冷静を装うように言う。

「だって…そんな…っ」

信じられない、と亜莉朱は呟く。

「つまり犯人はそれで確定ってことなのか？」

今まで黙って聞いていた代安が２人の間に口を挟んだ。

「一応、重要参考人と言うことになっているんだ。まだ確定できる

証拠がないからね」

「…じゃあなんで城下はわかったんだ？犯人が――――1年の杜遠（とおん）李（りぃ）だって」

＊　＊　＊　＊　＊

「最初、杜遠はこの事件のことを何も知らないような事を言っていたんだよ。＞情報屋＜ならすぐ知ってそうだけれど…でもまぁ僕もあまり気にして無かったしね」

医務室の壁に寄りかかり、代安に向かってそう言う城下。

亜莉朱は少し離れた場所で丸椅子に座り、俯いていた。

八藤は城下と入れ違いに出て行き、今はいない。重要参考人――杜遠李を連れてくるらしい。

「それで？何でわかったんだ？」

「杜遠は言ったんだよ、僕に復讐の意志が向けられているって。最初は知らないって言ってたのにね」

――『って、城下くん！？何故ここにいるんデスかっ！？』

――『えぇ～っと、なにか事件でもあったんですか？』

あの時の杜遠はまるで事件の事を知らないようであった。

その後、城下自らが事件についてざっと説明したが爆弾を仕掛けられているという状況だけで

メールの内容や、

犯人の復讐の意志、その矛先を

杜遠李には、話していない。

なのに、彼女は

――『やはり「情報偽造事件」と「能力者救出作戦」は今回の件での関係は確率的に低くそうだね」

――『そうですね、今回は“復讐”がキーワードですし』

――『よくわったね』

――『いえ、それほどでは…「15時時間立てこもり事件」は犯人からしてみれば、失敗のようなものですし計画を立てた城下くんへの復讐の意志が高いかと…』

あたかも知っていたかのように、彼女は城下の考えに同意した。そして、自ら証言したのだ。

知らないはずの、情報を。

「犯人とは断言しないけれど、可能性は否定できないからね。基本的にこの“学校”は嘘をつくと敵と見なされ、疑いがかけられる」

「それを知った上で嘘を貫こうとしたが、失敗。杜遠って奴は素人なんだな」

「まぁ僕は＞策略者＜だからプロだけどね」

城下がそう言うと代安は肩をすくめつつ、亜莉朱へ視線を向けた。

「だってよ、亜莉朱ちゃん。物理的証拠は無いけれど、証言はあるらしいぜ？」

「・・・・・・・・・、」

亜莉朱は俯いたまま、押し黙っている。

それから、ふと顔を上げて

「・・・・大丈夫です、私は本来の役割をきちんとするだけですから」

と無表情に淡々と言った。それから、城下に振り返る。

「城下くん、李ちゃんは今どこにいるの？」

「八藤を見張りにつけて牢へ向かっている所だと思うよ。僕達もこれから合流することになっているんだけど」

「つうか牢ってどこにあるんだ？そんなの無さそうだったけど」

代安がそう聞くと城下はそちらへ視線を向け、

「あぁ、この校舎の地下にあるんだよ」

と答えた。

「じゃあ、城下くん」

亜莉朱が椅子から立ち上がり、声を掛ける。

「うん、行こっか。あと代安、後で学校長が様子見に来るらしいから」

「わかった、」

「またね、お大事に。代安くん」

「あぁ、じゃあな」

部屋から出て行く2人に代安は小さく頷き、そう答える。

それからドアがパタンと静かに閉められた。

「…色々大変なんだな、ロイヤルメンバーって」

そして代安は2人が出て行った扉をしばらく見つめ、小さく苦笑いをする———。

＊　＊　＊　＊　＊

先程の爆発騒ぎでさすがに事件を隠しきれなかったため、生徒達にはテロリストが潜伏している可能性があると適当に説明したらしい。

不審物には十分注意するように、という白葉のアナウンスが終了して授業は再開された。

医務室から去り、静まり返った廊下に城下と亜莉朱の足音が響く。

城下は亜莉朱より少し前を歩き、亜莉朱は先程から俯いたままで2人の間に会話はない。

「早く行こうよ、ジョーカーくんっ！しぐれさん待ってるよっ」
すると、急に亜莉朱が走り出し城下を追い抜いた。
そう言って明るく笑う亜莉朱だが城下は答えず、その場に足を止めた。
「ジョーカーくん？どうかした？」
亜莉朱は不思議そうに首を傾げ、城下へ近づく。
「…アリス、」
城下はそう呟くと、亜莉朱の手を引いて彼女を抱き寄せた。
「ジョーカーくんっ？」
亜莉朱は驚いた声を上げる。そんな彼女に城下は言った。
「アリス。僕に言いたいこと、あるよね？」
「え…、言いたいこと…？」
「うん、さっき言いかけたよね？犯人について」
「でも…っ、それは…」
もういいんだよ、と亜莉朱は言い笑った。
城下には見えていないのに、無理をして。

全く完成していないボロボロの笑顔で。

「いいから、言って？大丈夫、僕は怒ったりしないから」

耳元で囁くと城下は亜莉朱を離し、彼女の瞳を真っ直ぐ見つめる。
そんな彼に亜莉朱は閉ざしていた唇をゆっくりと開いた。

「…本当に、李ちゃんが犯人なの？」

亜莉朱は言う。

「さっきも言ったけど、物理的証拠はないよ。でも証言はあるからね」

城下は亜莉朱を落ち着かせるように、静かに答えた。

「でも…っ、李ちゃんは…」

転入し、クラスに馴染めない亜莉朱に真っ先に声をかけて友達になってくれた人だったから。
亜莉朱はどうしても、そうは思えなかった。
彼女が、そんな人間だったなんて。

「私は…っ、李ちゃんの友達だから知ってるよ…！李ちゃんはそんな人じゃないっ、そんなの…何かの間違いだよ…っ」

ずっと、それが言いたくて。

ずっと、誰かに聞いて欲しくて。

亜莉朱はその場に座り込む。

「――アリス」

ふと城下が亜莉朱を呼んだ。

ビクッと亜莉朱は身体を強ばらせる。つい、感情になってしまい思っていた事を吐き出してしまった。

「ご、ごめんね。ノアく…」

「よく頑張ったね、アリス」

顔を上げ、慌てて謝ろうとした亜莉朱の言葉を城下が遮る。

「…え…？」

「もう、我慢しなくていいよ。辛かったよね、アリス」

「……ッ、」

「もう、泣いていいよ？僕しかいないから。僕はこれからもずっと

アリスと一緒だから」

城下はそう言って、亜莉朱の前に片膝をついて座ると、彼女に向かって微笑む。

「―だから、僕の前では泣いていいよ」

亜莉朱の頬に、一筋の涙が伝う。

そして次々と涙が溢れ出し、亜莉朱の視界を滲ませていく。

「う、わぁぁぁぁあ…ッ！！」

亜莉朱は両手を伸ばし、城下に抱きつくと、声を上げて泣き崩れた――。

ｅｐｉｓｏｄｅ．１３　地獄の番人（２）

それから亜莉朱と城下は八藤が待つ教室へ向かった。

「…しぐれさん」

教室へ先に入った亜莉朱が声をかけると、八藤が振り返った。

「あぁ、アリスちゃん。来てくれたんだね、ご苦労様」

困ったように八藤は小さく笑い、それから自分の横へと視線を投げる。

そこには俯いたまま椅子に座る李がいた。大人しくしているからか、身は拘束されていないらしい。

俯いているので表情はよくわからないが、短い前髪の下からは無機質な瞳が見えている。

なにも見えていないような、

なにも思うことはないような、

そんな、瞳が。

「・・・・・・・・李ちゃん、」

亜莉朱が哀しそうにそう呟くが、その呼びかけに李が応えることはなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「で、八藤。爆発物についてはもう大丈夫なわけ？」

教室から出て地下に向かっている途中、ふと城下が前を歩く八藤に声を掛けた。

「うん、爆発物についてはもう大丈夫だよ。心配ない。ったく、この“学校”もいい加減排他的だからね。爆発物を警察にすら任せられないし」

爆発物には割と苦労したのだろう、少々愚痴を交えての八藤の返答だった。

「まぁそうだよね。この“学校”は違法の軍隊組織みたいなものだし、でも――…」

それでも、暗黙の了解として此処が存在しているのは数々の成果と活躍があるからである。

表向きは知性、体力、情報網などを兼ね備えたスペシャリストを育てる、超に超のついた一流校ということになっているので本質を知っているのは国の最高機関のみだ。

「とにかく、よかったですよね！爆発物がないならとりあえず心配

の種はひとつ消えましたしっ」

そう言ってにっこりと笑う亜莉朱は、さっき城下の前で泣いていた少女とは別人のようであった。

友人関係にけじめをつけ、“反抗者”と敵対する“生徒”の関係へ。
それは亜莉朱にとって初めてのことであったが、この“学校”にいるかぎり避けて通れる道ではない。

――例えどんなに仲のよい友人でも、

――例え未来を誓いあった恋人でも、

もしかしたら・・・・・いつの日か、

敵対するかもしれないのだから。

しかし、亜莉朱は常に自分の能力を使おうとは思わなかった。
もし昼間、李と会話を交わした時に能力を使ったとしていたら李の裏切りがわかったかもしれない。
爆発に巻き込まれ、代安が怪我をすることもなかったかもしれない。

でも、それでも
常に他人を疑うようなことはしたくなかったから。

そして城下も八藤も代安も、――――誰一人として、

亜莉朱を責めることはしなかったのだから。

ならば、今自分に出来ることをしっかりとしようと亜莉朱は思う。
爆発が起きたために、慌ただしくなっている廊下で亜莉朱はそう誓った――――…。

「……着いたよ、」

――それから歩くこと数分後、着いたのは第二校舎の地下室への扉。

「開けてくれる？八藤」

「城下、お前な…」

肩をすくめて飄々と言う城下に、八藤は呆れたように溜め息をついた。
そして何の迷いもなく取っ手を両手で掴むと、重く頑丈な扉を押し開ける。
ギギギ…と錆の擦れ合う音がすると共に、ガコンと完全に開いた状態で扉が止まった。

「相変わらず暗いね、此処は」

八藤が独り言のようにぼやく。長い階段を降りるとその先は地上の校舎内とは造りの違う、点々と明かりが灯った薄暗い廊下が続いていた。

「足下気をつけて、アリス」

八藤と李の後に続く城下は、そう言うと隣にいる亜莉朱に手を差し出す。

「う、うん。ありがとう」

亜莉朱も手を差しだし、城下の手を握り返した。

「おやおや、仲がいいねぇ～」

ふふ、とからかうように言って小さく八藤が笑う。
それを城下は軽く受け流すと八藤に続いて歩き出した。

薄暗い廊下に複数の足音が響き、再び現れた突き当たりの扉に辿り着けば誰もが足を止める。

「・・・・・・・・・・・」

八藤は無言で一歩先に出、扉の目の前に立ちはだかる人物に向かい合った。

黒いマントにフードを深く被った、小柄な人物。その人物は八藤と目を合わせないまま、口を開く。

「“向かう先は牢獄、待ち受けるは地獄の番人”――暗証番号をどうぞ」

性別がわからない、抑揚のない声。

その声に淡々と八藤は答える。

「１８２７６５３９６２」

「暗証番号、承認しました。お通りください」

そう言うと共に扉が開き、八藤達は進んでいく。

中は明るい照明に照らされた、受付のようなカウンターが待ちかまえている。

しかし人影はなくカウンターの向こうにはポツンと椅子が一つあるだけだった。

「あれ？奥にいるのかな？」

八藤は首を傾げ、カウンターの奥を見据えた。

カウンターからの光の届かない、地下の最も奥。牢が並んでいる場所である。

「おーい、鈴奈（すずな）。いるか～？」

そう八藤が言いながら、カウンターへ身を乗り出した時――――――…、

「は〜いな」

どこからともなくあか抜けた声がし、八藤のすぐそば、カウンターの上にその声の主は現れた。

「こんにちは、しぐれちゃん。久しぶりにうちも、お仕事かしら？」

軽業師の用に爪先立ちで片足をつき、カウンターに降りたった人物は――…

「そうだよ。というか相変わらず悪趣味な格好しているね」

病的なまでに白い肌、墨のような色の髪は肩ぐらいで真っ直ぐに切りそろえられている。

そして、血のように赤い膝丈の着物と同じ色のパンプスに、白い帯を巻いて黒のカラータイツを履いていた。

「そう？そっちこそ相変わらずやね、セーラー服にそのロングスカート。昔の不良みたい」

にっこりと笑って、鈴奈と呼ばれる人物は言う。

「久しぶりに会ったと思ったらいきなり嫌みかい？折角あたしは鈴奈に仕事を持ってきたのに」

そんな彼女に心底気分を害したと言わんばかりな表情で、八藤も返す。

「あら嫌だ。うちはそんなつもりないんよ？しぐれちゃんが、先に言ったんとちゃいます？」

「なんの為に受付があるんだい？カウンターに人がいなきゃ意味がないだろう」

「最近人手不足なんよ。牢に入る人が増えててねぇ。事件性の全くない、ただの非行生徒を閉じ込めておくだけなんやけど」

笑顔を崩さないまま、呑気に鈴奈はそう返した。

「――鈴奈　織（しき）…！？」

すると、呆然とした声が響く。

八藤がその声に振り返れば、冷や汗を流して立ち尽くす李の姿が。

「うん？どないしたん？」

鈴奈は八藤から視線を外し、李の方を見る。

「どうして貴方が…っ！こんなところに…っ」

「ご覧の通り、追及者（question）、鈴奈　織。フランス生まれの１９歳ですわ」

動揺する李に気にすることなく、自己紹介をする鈴奈。

「…何だい、鈴奈。杜遠と知り合いか？」

そんな李の様子に、八藤は問いかける。

「さぁ？うち、その子と初対面のはずやけど」

鈴奈はきょとんとした後、不思議そうに首を傾げた。

「…まぁ、いいか。とりあえず杜遠を頼んだよ。彼女が今回の件の重要参考人なんだ」

話を切り替えた八藤に、鈴奈は表情を笑顔に戻し、

「了解ですわ。で、期限はいつまでです？」

と問い掛ける。

そんな彼女に八藤は少しだけ罰が悪そうな顔をした後、

「――明日まで、だ」

低い声で答えた。

episode．14　崩壊、再開

ガシャン、と鉄の柵が閉まる音が薄暗い空間に響く。
続けて鈴奈は鍵を閉め、立ち上がると振り返った。

「じゃあ明日、最終的にアリスちゃんに頼むって事でいいのかな？」
牢が並んだその場所には先程と同じメンバーがいる。
しかしただ1人李だけ、鉄柵の向こうに座り込んでいたが。

「うん。明日、アリスと付き添いが誰かまたここへ来るから。ね、アリス？」

城下はそう答え、隣で先程から俯いている亜莉朱の方を見た。

「あ、はい。また明日来ますね」

視線に気づいた亜莉朱は弾かれたように顔を上げ、そう言う。

「はいな。じゃ、明日」

鈴奈が答えて話に一区切りがつくと、八藤は腕にはめている時計を見る。

「もうお昼の時間だね。今日は朝から大変だったしお腹すいただろう？食堂へ行こうか」

八藤のその提案に、城下が口を挟んだ。

「……いや、僕は少しここに残るよ。八藤はアリスと一緒に先に行っててくれる？」

「別に良いが。城下どうした？」

「少し杜遠に聞きたいことがあるんだよ、いいかな？」

城下は八藤にそう答え、鈴奈に確認する。

「うちは別に構わへんで？“仕事”は夕方から始める予定やし」

「しかし城下、大丈夫なのか？今狙われている危険があるのは君だろう？」

「平気、銃持ってるし。自分の身くらい護れるよ」

心配を飄々とかわす城下に八藤はため息をつくと、

「わかった。しかし無茶だけはするなよ？何かあったら携帯で連絡してくれよ」

と言って了解した。

＊　＊　＊　＊

「じゃ、また後で」

地上への階段を上り、扉の前で亜莉朱と八藤は城下と別れた。簡潔な言葉を交わし、再び階段を下り始める城下。その時、

「ジョーカーくん…っ！」

控えめな、亜莉朱の声が彼を引き止める。

「うん？どうしたの、アリス」

城下は振り返り、亜莉朱に問いかけた。

八藤は亜莉朱より少し先に進んだところで、背を向けたまま立ち止まっている。

「気をつけてね…怪我とか、しないでね…っ」

泣きそうな顔で必死に言う亜莉朱に、城下は少々面食らった後

「大丈夫、僕は必ずアリスの所に戻ってくるよ」

優しい声でそう答え、微笑みかけた。

彼女が心配するのは当たり前だ。

今一番狙われていて危険な状態なのは自分の恋人、城下なのだから。

「そうだ。アリス、眼鏡外して」

「え？」

「眼鏡外してからもう一度、同じこと言ってあげる」

戸惑う亜莉朱に気にすることなく、城下は階段を上り詰め、彼女に

近づくと眼鏡を外した。

「ジョーカーくん…？」

そして、亜莉朱の青い瞳と城下の漆黒の瞳がかち合う。

「――大丈夫、僕は必ずアリスの所に戻ってくるよ」

城下が言うその言葉には、何の曇りはなかった。

だから、信じられる。

「…わかった。絶対だからね？」

「うん、絶対だよ」

「絶対絶対、絶対だからね？」

「うん。愛してるよ、アリス」

「私も…って、もう、恥ずかしいよジョーカーくん」

やっともとの調子に戻った亜莉朱は安心したように笑い、眼鏡を直す。

「じゃあ、また後でね。ノアくん」

そして、少し先で待っていた八藤と共に去って行き、城下も己の道を歩き出した――。

「――よかったんどす？城下くん、君1人だけ残って」

地下に降り立ち、しばらく歩くと壁により掛かっている人影に声を掛けられた。

城下はその声に前を向いたまま答える。

「いいんだよ。狙われているのが僕なら1人で行動している方がいい。それに――――…」

すべては役目を果たすため

すべては愛する人のため

様々な出来事が交差する世界で、真実を知ることは出来るのか

「いい加減、向こうも本格的に動いてきたみたいだからね」

完全崩壊まで、残り後わずか――…。

＊　＊　＊　＊　＊

「お。アリスちゃん、八藤」

長方形の広々とした空間の第二校舎の最上階、食堂にあるカウンターで昼食の注文を終えた亜莉朱と八藤はその声に呼び止められた。

ふと見れば窓側に並べられた丸テーブルの1つに代安の姿があった。朝に会った時と変わらぬ様子だったが、開いたワイシャツの胸元には包帯が見える。

「代安くん！怪我は大丈夫なの？」

「大したことないよ。お陰様でな。あとさ、少し話す事があるんだ。学校長サンからの伝言で」

それから亜莉朱達は代安と合い向かいに座り、一息つくと八藤が口

を開いた。

?

「で、なんだい代安?学校長からの伝言って」

「あぁ、俺が医務室に居た時に学校長サンが様子見に来たんだよ。怪我の具合とかまぁ色々聞かれたんだけどな、問題はその後――――…」

と代安は一呼吸置いてから、

「学校長は今、この“学校”内に居ない」

「な…っ!?こんな非常時に…」

「え、えと…どうしてですか?」

驚きを隠せない八藤に、戸惑う亜莉朱。

「校舎が1つ、爆破されただろ?その後始末だとか手続きとかで出張中。それに今回の事件は―、死人も出たらしいからな」

「・・・・・・・」

その言葉に、俯く亜莉朱。

そんな彼女を気にかけつつ、八藤は話を続ける。

「・・・・そうか。で、その死亡した生徒達は事件と何か関係があ

るのか？」

「爆発現場の教室は、特進クラスの補習授業をしている場所だったらしい」

「特進は確か生徒会候補生が集まっているクラスだよな。……彼らは何の役割候補だ？」

「――＞策略者＜、だ」

「…っ！」

亜莉朱は思わずガタンと音を立て、立ち上がった。
そのまま駆け出そうとする彼女を八藤は追おうとする。

「・・・・まだ話の途中だぜ。アリスちゃん」

そんな2人を横目で見ながらテーブルに置かれたコーヒーカップを持ち上げ、代安は言う。

「でも…っジョーカーくんがっ」

「アリスちゃん、座りな」

続けて八藤も亜莉朱の腕を掴み、彼女を止めた。

「でも、しぐれさん…っ！！」

「――いいから、座って」

抵抗しようとする亜莉朱に、八藤は容赦のない視線を向ける。
「……っ、」
固まる亜莉朱に苦笑いすると、八藤はなだめるように行った。
「気持ちはわかるけどね。大丈夫って城下が自分で言ったんだろう？なら、大丈夫だよ」
「…はい、すみませんでした」
亜莉朱はそう言うと再び椅子へ座った。
「で、話の続きなんだけど――――…」
と代安が話を続けようとした、丁度その時、
「ごめん、電話だ。…城下？」
八藤が携帯を取り出した。
画面を見て表示された名前を確認すると、耳に当てる。
「…城下か？…あぁ、こっちは大丈夫だ。それに代安と合流した。後、代安の話によると学校長が今留守らしいんだ。…アリスちゃん？　…わかった」
すると八藤は振り返り、亜莉朱へと携帯を差し出した。
「城下が、アリスちゃんに代われって」

「あ、はい…」

不思議そうに亜莉朱は携帯を受け取った。

「もしもし、ジョーカーくん？」

episode．15　崩壊、再開（2）

コツコツ、と薄暗い通路に響く1人分の足音。
そこを歩いているのは、白い髪の少年である。
黒色の携帯電話を耳に当て、会話をしているようだった。
『じゃあもう李ちゃんとの話は終わったんだね？』
携帯から聞こえてくる、少女の声。
「うん、まぁ話と言うか確認だけどね。とりあえず終わったから今、そっちに向かってるよ」白い髪の少年はその声に答える。
『わかった。気をつけてね』
「うん。また後でね、アリス。　――あ、携帯切る前に八藤に代わってくれる？」
白い髪の少年はそう言うと、歩く足を止めた。携帯を耳に当てたまま、前を見据える。
『八藤だ。どうした？』
そうしている内に電話の相手は変わり、先程とは違う少女の声。

「――そろそろ、来るみたいだね」
遠くから聞こえてくる、複数の足音。
『…城下？なんだって？』
「僕は戦闘のプロじゃないから少し、不安だけど。まぁ――これくらいの人数なら大丈夫、かな？」
地下だからこそ、音は良く響く。段々とこちらに近づいてくる、足音。
『――どういう事だ、城下？』
電話の相手は少年に問う。
少年―城下はそれに答えつつ、腰に巻いたベルト後ろから拳銃を取り出した。

「もうすぐそっちにも向かうみたいだから、気をつけて―ってこと」
『――な、城下！何を――』
焦る声が、電話から聞こえる。薄暗かった辺りが、徐々に暗闇となっていく。
「もう来たみたいだ。また後で、連絡するよ」
城下は携帯電話を仕舞うと、銃の引き金を引いた。
バタン、と勢いよく扉の開く音。
続いて一秒の間もなく聞こえるのは、銃の連射音――――。
＊　＊　＊　＊　＊
「な、城下！何を――…っ！？」
場所は戻って食堂。
電話の相手に向かって、八藤は言う。しかし、城下の声と共にすぐに通話は断ち切られてしまった。
「…しぐれさん？どうかしたんですか？」
「城下が――」
八藤が電話の内容を伝えようとした、その時――――…、

『―聞こえるか、全校生徒達。我等は反逆者集団＞ｇｒｏｕｐ＜』
突如聞こえてきた、校内放送。
「な…っ！？」
昼時で混雑してきた食堂にざわめきが轟く。
『我等は第一校舎を占拠した。学校長がいない今、我等を止めるものはいない。これから＞集団＜以外の生徒達を潰しにかかる――命が惜しければ、抵抗はするな』
ブツン、と音と共に放送は切れた。
「――こちら＞ｈｅａｒｔ＜、＞情報管理部＜へ通信。放送部はどうなっている？」
真っ先に声を発したのは八藤。携帯を手にし、状況確認を進める。
『占拠された模様です。第一校舎内部は全て――』
「誰か緊急連絡を！生徒委員会　＞ｓｔｕｄｅｎｔ＜のメンバーを全員ここに集合させろ！」
代安も立ち上がり指示を飛ばす。すると、壁にかけてある緊急用の受話器を近くにいた１人が手に取った。
「非戦闘員は後ろに下がれ！窓には近づくな！」
その間にも、代安は指示を出す。彼の声の直後に皆席を立つと、下がり始める。
「＞委員会＜のメンバー、数人連絡取れません！」
遠くから聞こえてきた声。
「連絡取れないのは何人だ！？」
「５０人中２０人です！」
「ち…っ、＞集団＜の連中が混じってたか」
代安が舌打ちする。
そして――
「＞集団＜らしき者が数十人、こちらに接近中です！全員武装し

ている模様！」
廊下から食堂へと飛び込んできた、＞委員会＜メンバーが報告する。
「もうきたか…っ、代安。アリスちゃんを連れて下がっていろ。
＞委員会＜は武装してる奴だけ前に出てわたしと応戦だ」
八藤は呆然と立ち尽くす亜莉朱の腕を掴んで代安に押しつけると、
再び指示を出す。
「ま、待ってしぐれさん！これは一体…！！」
腰のホルダーからザイバルナイフを取りだし、前に出て行こうとする八藤に亜莉朱が言う。
「―常日頃から、この“学校”に不満を持っている生徒達の反逆行為だ」
亜莉朱をかばうようにして立ちふさがった代安が、それに答えた。
「ここ数年なかったらしいがな。…俺も初めてだぜ、学校の反逆者なんてな。奴らにとっては――学校長のいない今が、絶好のチャンスだ」
「そんな――」
亜莉朱の声を遮るように、バンッ！と、食堂にある扉の全てが開け放たれる。
そこから、顔の下部分を黒い布で覆い隠した集団がなだれ込んできた。
「銃は使わないみたいだな――　ま、こんな大人数のいる建物の中で使ったらどうなるかくらいわかるよな」
＞委員会＜のメンバーや八藤、戦闘員が応戦している間。
亜莉朱と共に後ろに下がっている代安は銃を構えたまま暇つぶしのように言う。
「俺はいざって時のために一応持っとくけど。…アリスちゃん、俺から離れるなよ。その時の命の保証はないからな」
「――はい、」

＊　　＊　　＊　　＊

「…くそ…っ！きりがない…っ」

亜莉朱達の前方で、壁を作るように立ちはだかりながら戦う八藤と＞委員会＜、そして＞実行者＜の生徒は苦戦していた。日頃、授業や訓練などで鍛えられている彼らだが、実戦の経験をしている生徒は少ない。そのため、例え技術が高くとも相手を倒すことが簡単だとは言えない。

八藤はその点は問題ないが、今戦っている他の生徒が必ず反逆者達に勝てるとは限らないのだ。

「ぐ…っ！」

すると、八藤のすぐ近くで応戦していた生徒が、＞集団＜に押されて転倒する。

実行者であろう少年は、＞ｈｅａｒｔ＜の文字が施された校章を胸につけていた。

「くそ…っ！大丈夫か！？」

金属と金属がぶつかる音、響き渡る騒音の中、八藤は声を張り上げる。

それから彼女は目の前の敵にナイフを振るい、それをかわして仰け反った相手の胸倉を掴むと、そのまま勢いをつけて踏み込むと床に叩きつけた。

「かは…っ」

相手の背中を思い切り叩きつけた為、肺から酸素が抜けたのか、

力無く声を漏らす相手。
その拍子に顔を覆っていた布がほどけ、少女の顔が現れる。だが八藤は構わず少女の鳩尾に膝蹴りを入れて相手を気絶させた。
そして彼女は立ち上がると、後ろから次々と攻撃を仕掛ける敵を凪払い、先程転倒した少年へと視線を向ける。
その先には床に倒れ込み、今留めを刺されようとしている少年と、それを見下す少年――八藤にとってはよく知る人物だった。

「な…っ、碕沢！？」

八藤は驚いたように言う。彼女が呼んだ少年―碕沢（サキザワ）はその声に気付くと、振り返った。
「おぉ、八藤じゃねぇか」
碕沢は構えていたナイフを下げてにっこりと笑う。対して八藤はナイフを構え直し、彼へと向けたままである。
「碕沢…、お前は一体何をしているんだい？＞委員会＜、委員長のお前が…」
背が高く、淡い茶色の髪をした彼は、明るい性格で生徒からの人望も厚かった。同級生で八藤のよき理解者の1人でもある。
そして真面目な彼は＞委員会＜のまとめ役、トップの存在の委員長を勤めていた。
その彼が、何故――

「何って…裏切りだよ、八藤」

八藤の目が驚きに見開かれる。それから悲しみをたたえた瞳へと変わり、

そして――

「…そうかい。では、さよならだね」

冷酷な、己の敵と対立する瞳へと変わった――――。

？

episode.16　激突

辺りに響く悲鳴と、ガラスの砕ける音。
ひっくり返されたテーブルと、破壊された物が散乱した室内の中心に1人の少女が埋もれていた。
「…く…っ」
こめかみから血を流し、あちこちに擦り傷を負った彼女は、手をついて立ち上がる。
そんな彼女から少し離れた場所で、余裕そうに構える少年。
「ははっ。どうした、八藤？＞生徒会＜メンバーのお前がそんな様で」
そう言って笑う彼は擦り傷を負っているが、少女程ではない。
「…驚いたよ碕沢。君がこんなに強いなんてね。てっきり頭脳派かと思っていたのに」
なんとか立ち上がった彼女――八藤は、再びナイフを構えてそう言った。
余裕の表情で軽口は叩いているものの、心なしか彼女の表情は険しい。
そんな彼女に少年は言う。
「伊達に委員長を名乗ってるわけじゃないんだぜ、俺だって。なぁ、八藤――」
「……何だい？」
「俺達の所へ、＞集団＜へ寝返らないか？」
その言葉に、八藤は眉をひそめる。
「……何を、言って…」

「俺は本気だ。お前なら>集団<へ歓迎してやる。知らない仲でもないんだし、きっとお前にとってもその方がいい」
俯く八藤。そして数秒の沈黙の後、口を開いた。
「…碕沢、」
「…何だ？」
「……残念だ、君の話には乗れない」
八藤の言葉に、納得するように頷く相手は――碕沢。
「そうか、なら仕方ない――――なっ！」
彼はその言葉と同時に走り出し、八藤へと向かっていく。
対する彼女は後退するが、距離はあっという間に詰められてしまう。
そのまま八藤がバックステップをしつつ、碕沢から突き出される拳をギリギリの所でかわして行く。
「逃げてるばっかじゃダメだろ、八藤」
すると彼は何の前触れもなく、ジャガーナイフを取り出すと、八藤へ振り下ろした。
「…っ！」
とっさにのけぞってかわす八藤。それからすぐに身を起こし、体勢を整えようとするが…
「遅いんだよ」
碕沢は素早く手を引き、代わりに足を突き出して、八藤の腹を横殴りに蹴り上げた。
「く…っ」
そして彼女は壁に叩きつけられる。なんとか受け身を取ったものの、先程から体力を削られているため、少しのダメージも致命的だ。
「まだだ…っ！」
しかし、叩きつけられた八藤は壁を伝ってずるずると床に滑り落ち、足が地面に着くと、碕沢へ向かって走り出した。
八藤が大きく踏み込み、サバイバルナイフを振りかざす。碕沢がすかさず自分のナイフでそれを受け止める。ガキンッと火花が散り、２つの刃がぶつかり合う音が響く。

「お、なかなかやるじゃん」
心底楽しそうに、碕沢が言う。
すると八藤が一旦身を引き、勢いをつけて身を翻すと回し蹴りを仕掛けた。
今までとは違う素早い動作に、碕沢の反応が少し遅れる。
「…っと、危ねー」
碕沢はギリギリでそれをかわすと、先程反応が倒れた位置へと身軽に飛び移る。
それから八藤の連続反撃に備えて身構えるが、彼女からの攻撃はない。
ただこちらを見据えているだけである。
不審に思い、碕沢は言う。
「…どうした？八藤」
彼女は答えない。
微動せず、ただ碕沢を見据えているだけ。
そんな彼女に肩をすくめて、おどけるように碕沢が言った。
「まさか、疲れて降参とか？それはないだろー？」
彼女は答えない。
ただ時間だけが経つのを待つかのように――――…
「…なんだよ？一体？」
いつまで経っても答えない八藤に不機嫌になった碕沢。
そんな彼に、八藤はやっと口を開いた。
「たいしたことないんだね、委員長。あたしは正直、失望したよ」

無表情に、八藤は言う。
それに対して碕沢は不機嫌そうに、眼鏡の奥の目を細めた。
「あぁ？なんだと？」
「まぁ、端から君に期待などしていないが。まさかここまで君が落ちこぼれていたとは思わなかったよ」
「な――ッ、……そんな安い挑発に乗るかよ」
碕沢は思わず踏み出しかけたが、それを戻し、八藤を睨みつける。
彼女は全く動じず、唇の端を上げて答えた。
「そうかい？なら言わせて貰おうかな、委員長。それだから君は――＞生徒会＜には選ばれないんだよ…落ちこぼれの委員長くん？」
その言葉に碕沢の瞳が怒りに満ちる。かつて誰よりも上を目指した彼に対して向けられた言葉と屈辱に、彼の手が震えていた。
「ふ…っふざけ…っ！」
「怒っているのかい？委員長。“そんな安い”挑発には乗らないのだろう？」
「…ッ！乗らねぇよ…っ、だがな…お前だけは――絶対ぶっ殺す！」
碕沢は叫ぶと、片足を下げて構え、走り出そうとする。
その時――

カン…ッと、足元から小さな音がした。

破壊された物が散乱している場所だ、足に何かがぶつかるのは不自然ではない。

――だが、彼は知っている。

＞委員会＜のトップとして、それなりの戦闘経験をしてきた彼は――…

碕沢が足下を見る。

瓦礫に埋もれて見え隠れしていたのは、

最早地雷にも近い威力を発揮する、時限装置付きの小型トラップだった――。

ドバンッ！と跳ねるような爆発が起こり、碕沢はとっさに別の場所へと跳ぶ。

「…っ！くそ…っお前…！！」

着地した碕沢は立ち尽くす八藤を睨みつけるが、また足下でかすかな音がした。

再び起こる爆発。
「な…っ！…うわっ！」
碕沢は少しだけ反応が遅れたのか、今度は爆発に押され、壁に叩きつけられる。
「ぐ…っ、」
打ち所が悪かったのか、彼は座り込んだまま立ち上がれない。
そして、八藤は彼に静かに歩み寄っていく。
碕沢は力の入らない手でナイフを構えると、八藤に向けた。
「お前…いつの間に…こんな、仕掛けやがって…」
そんな彼に、八藤は呆れたように言う。
「気づかなかったのかい？あたしはただ君の攻撃に押されて、転げ回っていたわけではないんだよ」
「なら、お前はわざと――――」
「そう。君の動きは大体読めたから、そこに倒れた振りをしてトラップを仕掛けて置いたんだ」
まさかこんなに上手く行くとはね、と八藤は笑って
「それに今君がいる場所は、あたしがついさっき、叩きつけられた場所でもあるだろう？呑気に座ってていいのかい？」
「――――ッ！？」
碕沢は冷や汗を流しながら夢中で腰を浮かせると、前へと進もうとするが、足がもつれて転倒する。
だが、なんとか動けない体を奮い立たせ、立ち上がると八藤の脇を走り抜けた。

しかし、爆発は起こらない。

そして、碕沢は自分の体に違和感を感じ始めた。

左の脇腹から、熱くて鋭い痛み――――…

視線を下へと向ける。

脇腹がぱっくりと開き、赤い血が溢れ出て来ていた。

「な…っ！？ぐぁあ…っ」

顔は青ざめ、鼓動が早くなっていく。脇腹を押え、ゆっくりと、碕沢は視線を背後へと向ける。

背後には背を向けたままの八藤。その手には、赤く染まったナイフが鈍い光を放っていた。

彼女が振り返る。

そして、言った。

「――君の負けだよ、碕沢」

その言葉と共に、碕沢は崩れるようにその場に倒れ込んだ――――…。

＊　＊　＊　＊

「しぐれさん！大丈夫ですか！？」
すべてが終わり、静さが満ちる室内に誰かの声が響く。
背を向けていた八藤はその声に振り返り、答えた。
「あぁ、アリスちゃん。大丈夫、平気だよ」
近くに駆け寄ってきた亜莉朱は、八藤を見るなり慌てたように言う。
「でっでも、しぐれさん怪我してますよ！手当てしないと…っ。あ、あと委員長さんも。
医療班の人、呼んできますねっ」
そう言い残すと、パタパタと何処かへ走り出す亜莉朱。
八藤はそんな彼女を見届けると、辺りを見回した。つい数時間前とは一変してしまった、室内の様子がよくわかる。
床に付着した血の後や、各場所に点々とうつ伏せで倒れている、生徒または＞集団＜と呼ばれる反逆者達。そして彼等を囲い、治療を

している医療班の姿もあった。
八藤は小さく息を吐く。被害は半々と言った所だろう。

それから数分後、亜莉朱が医療班を連れて戻って来た。
医療班と言っても大人ではなく、ほとんどがＴ－Ｍ．Ｓの生徒だ。
生徒でもしっかりとした医療の教育を受けた医療班の生徒は、医者と同じレベルと言ってもいいだろう。
制服の上に白衣を羽織り、てきぱきと処置を始める彼等。
「頭以外で強く打ったところはありますか？それに痛む所は」
頭に包帯を巻きながら、八藤に問う医療班の生徒。
「いや、背中を強く打ったが受け身を取ったから問題はない」
淡々と八藤は答えつつ、横で倒れている碕沢を見た。
彼は意識がないのか、治療をしている生徒の呼びかけに答えている様子はない。
そんな彼の周りには血だまりが出来ているものの、八藤はそんなに深く刺したわけではないから大丈夫だろう。
八藤は切り替えるように、反対隣にいる亜莉朱に言った。
「で、アリスちゃん」
「はい？」
「代安はどうしたんだい？」
先程から亜莉朱の隣に、一緒にいたはずの代安の姿がないのだ。
不思議そうに言う八藤に、亜莉朱はにっこり笑うと、
「代安くん、無事ですよ。医療班のお手伝いしてます。患者さん運びの」
と言った。
それに八藤は安心したように笑い、答える。
「そうかい。ならよかった」

「――ま、＞策略者＜は無事ではないだろうな」

ふと、掛けられた言葉に八藤の笑顔が凍りつく。
亜莉朱の顔が、八藤の背後を見つめて驚きの色に変わった。

八藤が、ばっと勢い良く振り返る。そこにはいつの間にか上半身を起こし、こちらを見ている碕沢の姿が。
「…どういう事だ？」
怪訝そうに、問いかける八藤。
「とりあえず今邪魔なのは＞策略者＜の城下乃愛だろう。＞集団＜の１０人を先に城下へ向かわせたんだ」
八藤に焦りの表情が浮かぶ。
「な…まさか…っ！」
「今頃半殺しで拉致られてるか、死んでるか――まぁどちらかだろうな」
彼はそう言うと皮肉に笑った。

そして亜莉朱は呆然と立ち尽くす――…。

＊　＊　＊　＊

――薄暗い、沢山のモニターが並べられた部屋。
その中央の画面には、荒れ果てた食堂が映し出されている。

『――しぐれさん！大丈夫ですか――…』

映し出された室内の声まで、こちらへと伝わっていた。

そして、その画面を見つめる1つの影――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0980m/

デッド　オア　アライヴ

2011年10月7日10時58分発行